京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2020-12

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇二〇-一二　白河街区跡・吉田上大路町遺跡

白河街区跡・吉田上大路町遺跡

2021年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

白河街区跡・吉田上大路町遺跡

2021年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、近衛中学校整備に伴う白河街区跡・吉田上大路町遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

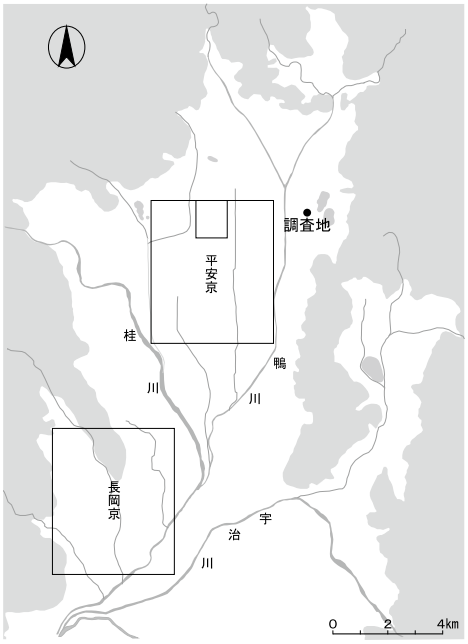
令和３年12月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　　言

1	遺　跡　名	白河街区跡・吉田上大路町遺跡　（京都市番号　18 S 777）
2	調査所在地	京都市左京区吉田近衛町26番地53他
3	委　託　者	京都市　代表者　京都市長　門川大作
4	調 査 期 間	2020年７月13日～2020年12月19日
5	調 査 面 積	790㎡
6	調査担当者	松永修平
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「御所」・「吉田」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺 構 番 号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺 物 番 号	通し番号を付し、写真番号も同一とした。
13	本 書 作 成	松永修平
14	備　　考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過 …… 1
２．位置と環境 …… 3
（１）歴史的環境 …… 3
（２）既往の調査 …… 3
３．遺　　構 …… 5
（１）基本層序 …… 5
（２）遺構の概要 …… 5
（３）第３面〔平安時代末期から鎌倉時代初頭〕の遺構 …… 5
（４）第２面〔鎌倉時代〕の遺構 …… 7
（３）第１面〔室町時代以降〕の遺構 …… 10
４．遺　　物 …… 11
（１）遺物の概要 …… 11
（２）土器類 …… 11
（３）瓦類 …… 14
（４）土製品・石製品 …… 17
５．ま と め …… 18

図　版　目　次

図版１　遺構　第３面平面図（１：200）
図版２　遺構　第２面平面図（１：200）
図版３　遺構　第１面平面図（１：200）
図版４　遺構　土坑384・388・390・406・305実測図（１：60、土坑305のみ１：40）
図版５　遺構　建物１実測図（１：80）
図版６　遺構　塀１・２実測図（１：60）
図版７　遺構　井戸669実測図（１：80）
図版８　遺構　布掘り塀596・664、瓦溜り164、土坑587実測図（１：60）
図版９　遺構　１　調査区北半　第３面全景（北から）
２　調査区南半　第３面全景（西から）

図版10　遺構　1　土坑388完掘状況（南東から）
2　土坑390完掘状況（南から）
3　土坑305遺物出土状況（北から）
4　柱列１（東から）
図版11　遺構　1　調査区北半　第２面全景（北から）
2　調査区南半　第２面全景（西から）
図版12　遺構　1　溝300・368（調査区北半、北から）
2　溝300・368（調査区南半、北から）
3　溝638（西から）
4　門１～３完掘状況（南東から）
図版13　遺構　1　井戸669（北東から）
2　井戸669掘り下げ状況（北西から）
3　井戸669断面（北西から）
図版14　遺構　1　井戸544（北から）
2　布掘り塀664（東から）
3　瓦溜り164（東から）
4　瓦溜り164瓦出土状況（北東から）
図版15　遺構　1　調査区北半　第１面全景（北から）
2　調査区南半　第１面全景（北から）
図版16　遺物　土器類１
図版17　遺物　土器類２
図版18　遺物　瓦類・土製品・石製品

挿　図　目　次

図１　調査位置図（１：2,500）　……　1
図２　調査区配置図（１：1,200）　……　2
図３　調査前全景（南から）　……　2
図４　作業状況（北西から）　……　2
図５　周辺調査位置図（１：2,500）　……　4
図６　土層柱状図（１：40）　……　5
図７　柱列１実測図（１：60）　……　6
図８　砂取土坑群Ⅱ実測図（１：80）　……　7
図９　門１～３実測図（１：80）　……　8
図10　溝300・368・638断面図（１：60）　……　9
図11　井戸544実測図（１：80）　……　9
図12　土坑30実測図（１：40）　……　10
図13　出土土器類実測図１（１：４）　……　12
図14　出土土器類実測図２（１：４、102のみ１：６）　……　13
図15　出土瓦類拓影及び実測図（１：４）　……　15
図16　出土土製品・石製品実測図（１：４）　……　17
図17　近衛中学校周辺調査遺構図（１：1,500）　……　18

表　目　次

表１　周辺調査一覧表　……　4
表２　遺構概要表　……　5
表３　遺物概要表　……　11

白河街区跡・吉田上大路町遺跡

1．調査経過

調査は、京都市立近衛中学校整備工事に伴うもので、前年度に当地の東側で行われた調査[1)]に引き続いて行われた２期目である。調査地は、京都市左京区吉田近衛町26番地53他に位置している。当地は平安時代後期の遺跡である白河街区跡の北端に位置し、仁平元年（1151）に造営された福勝院の推定地とされている。また、弥生時代の集落跡である吉田上大路町遺跡の南西部に該当する。

調査は、2020年７月13日から開始した。調査区は東西約25ｍ、南北約35ｍで、北東の一部を欠く方形を呈する。体育館跡地であり周囲にコンクリート基礎が巡っていたため、遺構面は島状に残存していた。場内に土置き場を確保するために南北の反転調査とした。まず、北半部の調査を行い、重機により現代盛土を掘削した後、人力で遺構の検出・掘削を行った。北半部の調査終了後、埋め戻しを行い、南半部の調査を行った。

調査の結果、平安時代末期から鎌倉時代の建物や門・溝・井戸・砂取土坑群、室町時代以降の柱穴群や土坑などを検出した。検出した遺構は、実測・写真撮影・オルソ測量などによる記録を行った。また、北半部・南半部両方で、下層遺構の有無を確認するために人力および重機を用いて断割調査を行ったが、平安時代より古い時期の遺構は確認できなかった。調査終了後は、原状復旧および重機掘削の際に出たコンクリートガラの搬出を行い、2020年12月19日にすべての作業を終了した。

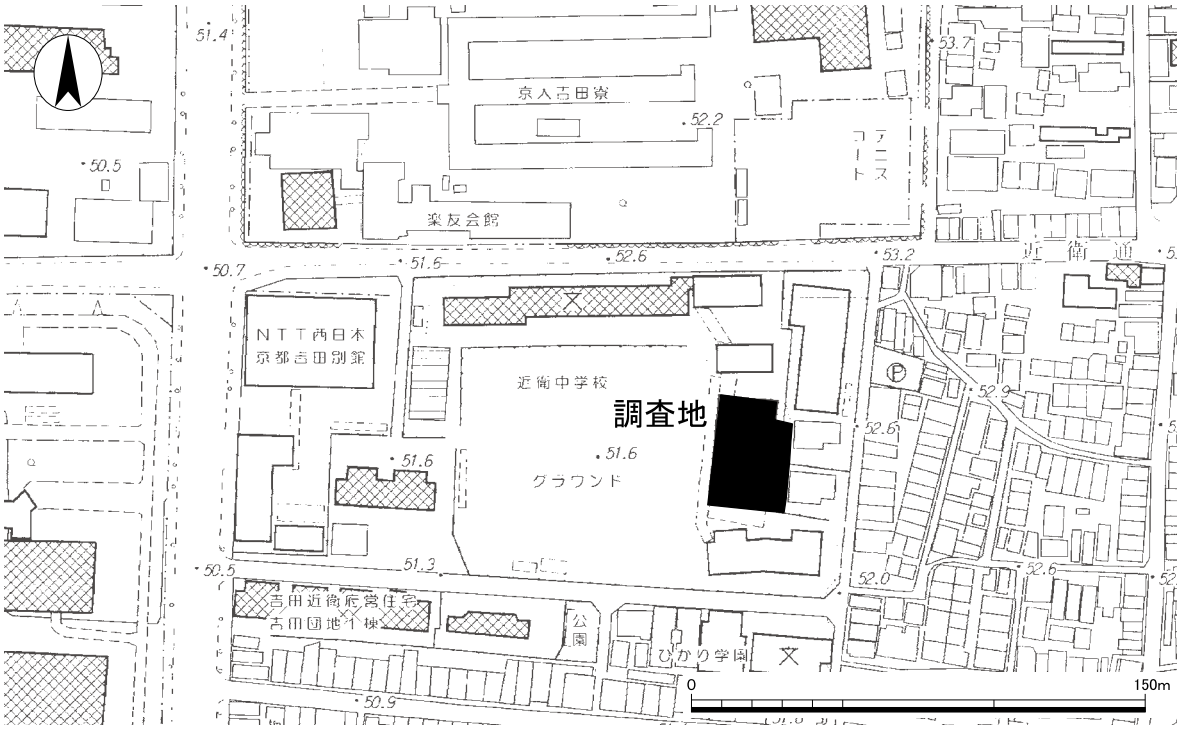


図１　調査位置図（１：2,500）

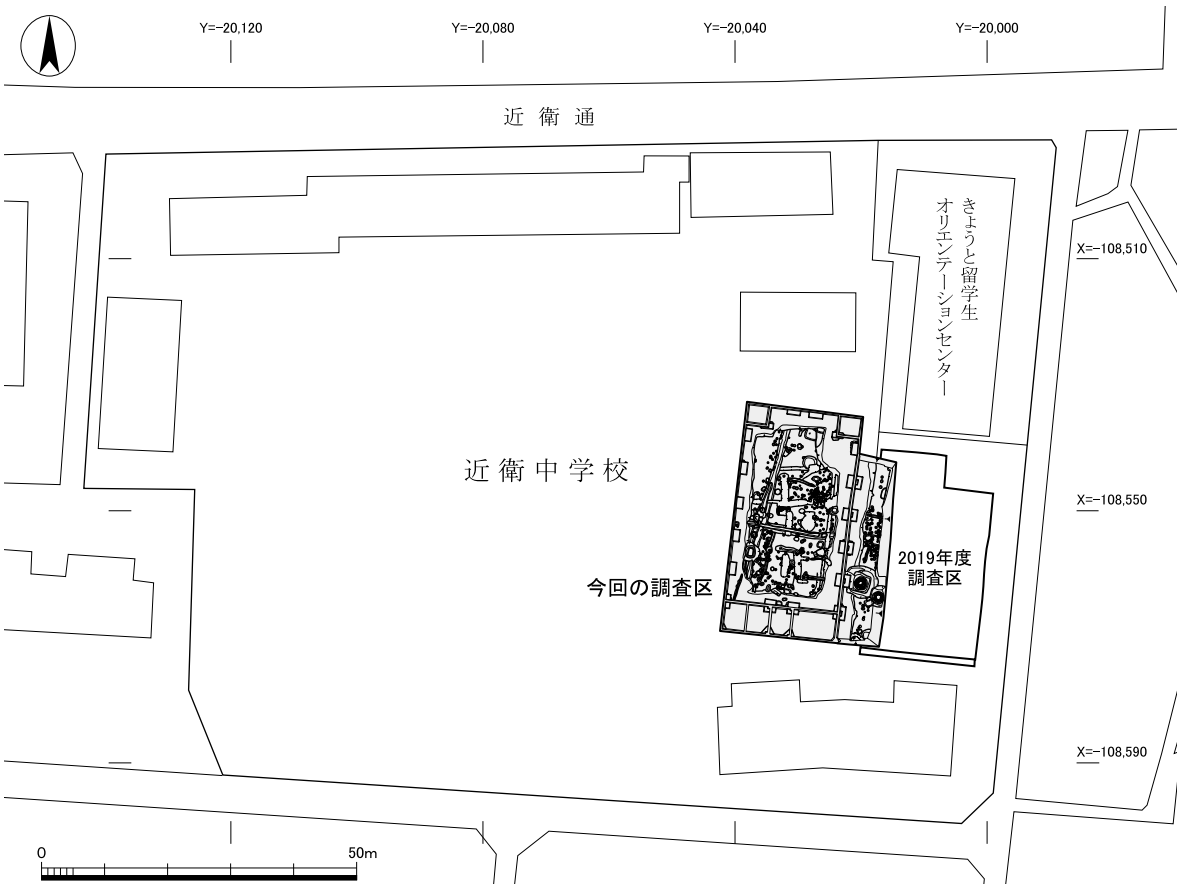


図２　調査区配置図（１：1,200）

図３　調査前全景（南から）

図４　作業状況（北西から）

調査中は、適宜、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の臨検を受け、当事業の検証委員である近畿大学の網 伸也教授、京都大学の伊藤淳史助教の指導を受けた。

註

１）『白河街区跡・吉田上大路町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2019－12　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2020年

２．位置と環境

（１）歴史的環境

調査地は、白河街区跡・吉田上大路町遺跡にあたる。白河街区は、平安時代後期に白河天皇の御願寺である法勝寺をはじめとする六勝寺を中枢として、院御所である白河殿の造営や、公家の邸宅、皇族らによる寺院が造られた地域で、この一帯を中心として街路が整備されるとともに、周辺の開発が進んでいった。当地は、白河街区推定範囲の北端に位置し、鳥羽天皇の皇后、藤原泰子（関白藤原忠実の娘、高陽院）の御願寺である福勝院（仁平元年（1151）建立）の推定地とされている。福勝院の位置については、いくつかの史料から現在の近衛中学校あたりと推定されている[1)]が、これまで発掘調査で福勝院に直接結び付く遺構や遺物は確認されていない。

（２）既往の調査

今回の調査地周辺では、京都大学とその関連施設を中心に数多くの発掘調査が行われてきており、縄文時代から近世に至る各時代の遺構が確認されている。ここでは、福勝院の推定地とされている近衛中学校とその近辺で行われてきた既往の調査についてまとめる。

調査１は、1977年度に今回調査地の北東部で行われた調査で、鎌倉時代から室町時代の東西溝や土坑を検出しており、土坑からは鎌倉時代の瓦がまとまって出土している。調査２は、1981年度に今回調査地の北側で行われた調査で、鎌倉時代の南北溝や、室町時代の溝・井戸を検出している。調査３は、1987年度に行われた調査で、縄文時代から弥生時代の自然流路、鎌倉時代の建物や柵・溝・墓・集石などを検出している。調査４は、2011年度に行われた調査で、縄文時代から弥生時代の自然流路、鎌倉時代の区画溝や集石、室町時代の柱列や集石などを検出している。調査５は、2013年度に行われた調査で、縄文時代から弥生時代の溝や、飛鳥・奈良時代の井戸や溝、平安時代の溝、鎌倉時代の土取土坑などを検出している。調査６は、2016年度に行われた調査で、鎌倉時代の建物や柱列・南北溝、室町時代の柱列や南北溝などを検出している。調査７は、今回の調査に先立つ近衛中学校整備工事に伴う１期目の調査で、2019年度に今回調査地に東接する場所で行われ、鎌倉時代の南北溝や堤状の高まり、土壙墓・井戸・柵など、室町時代の土壙墓や溝・井戸・柵など、江戸時代の溝や土坑などを検出している。

以上、既往調査の成果を見てきた。上述したように、調査地周辺は平安時代後期に建てられた福勝院の推定地であるが、創建期にさかのぼる遺構・遺物は確認されておらず、福勝院と直接結びつく遺構・遺物は確認されていない。

註

１）　杉山信三『院家建築の研究』　吉川弘文館　1981年
　　川上 貢・泉 拓良「京都大学構内遺跡と調査の概略」『京都大学構内遺跡調査研究年報』　1977年
　　濱崎一志『都市空間の変遷に関する歴史的考察』　京都大学　1994年

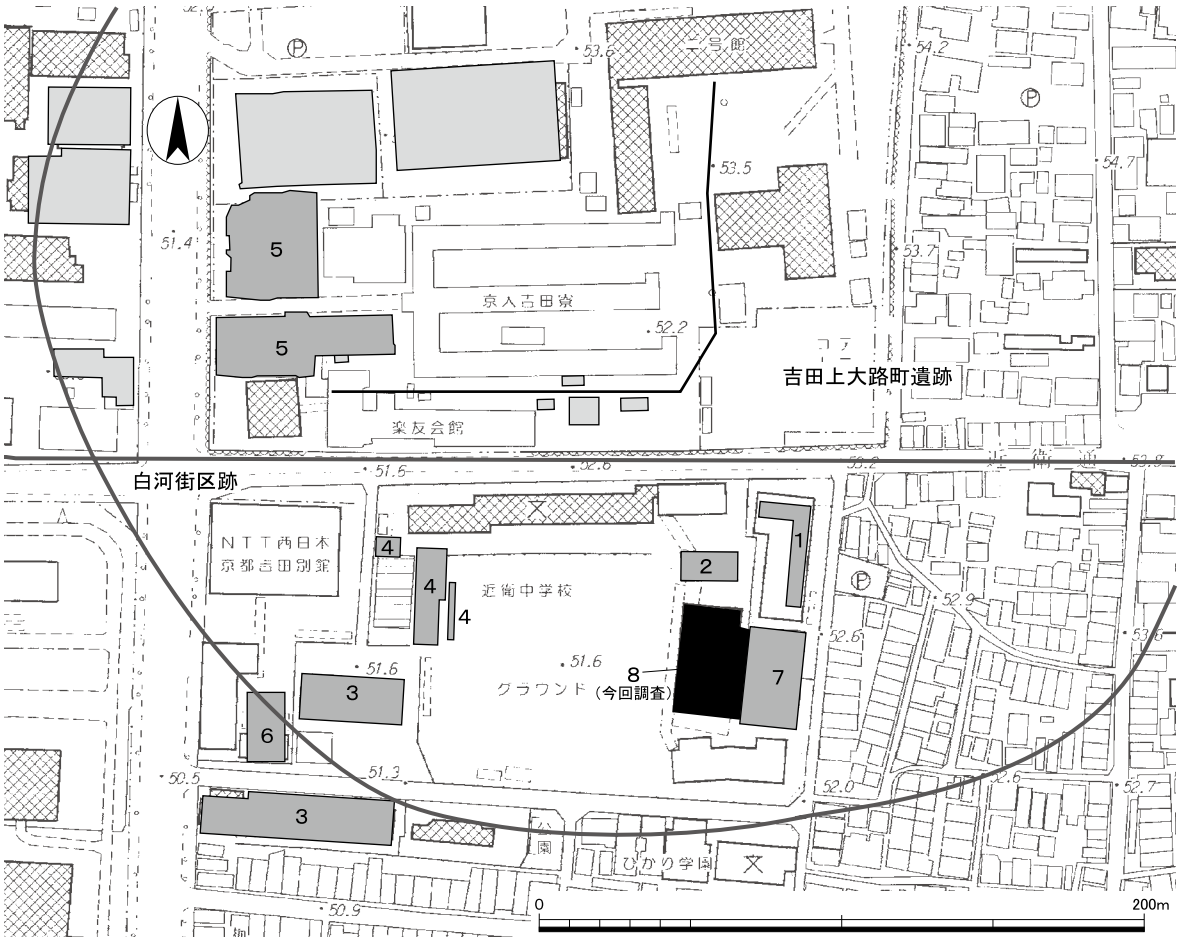


図５　周辺調査位置図（１：2,500）

表１　周辺調査一覧表

調査番号	調 査 地	調査年度	調査機関	主な調査成果	調査面積（㎡）	文　献
1	吉田近衛町26番地	1977	府教委	鎌倉時代～室町時代の溝、柱穴、土坑。	約600	『埋蔵文化財発掘概報』 京都府教育委員会 1978年
2	吉田近衛町26番地53（市立近衛中学校内）	1981	埋文研	鎌倉時代の溝。室町時代の溝、井戸。	183	『昭和56年度　京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1983年
3	吉田近衛町26番地66・67	1987	文博	縄文時代～弥生時代の自然流路など。鎌倉時代の建物、柵、溝、墓、集石など。	1,200	『吉田近衛町遺跡　京都文化博物館調査研究報告　第4集』 京都文化博物館　1989年
4	吉田近衛町（市立近衛中学校内）	2011	埋文研	縄文時代～弥生時代の自然流路、遺物包含層。鎌倉時代の区画溝、集石など。室町時代の柱列、集石など。	333	『白河街区跡・吉田上大路町遺跡』 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-3　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2012年
5	京都大学吉田南構内	2013	京大	縄文時代～弥生時代の溝。飛鳥・奈良時代の井戸、溝。平安時代の溝。鎌倉時代の土取り土坑。	1,868	『京都大学構内遺跡調査研究年報　2014年度』 京都大学埋蔵文化財研究センター　2016年
6	吉田近衛町26番地54	2016	埋文研	鎌倉時代の建物、柵、溝など。室町時代の柵、溝など。	287	『白河街区跡・吉田上大路町遺跡』 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-12　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2017年
7	吉田近衛町26番地53他（市立近衛中学校内）	2019	埋文研	平安時代の土壙墓など。鎌倉時代の溝、堤状高まり、土壙墓、井戸、柵など。室町時代の土壙墓、溝、井戸、柵、柱列など。江戸時代の溝、土坑。	530	『白河街区跡・吉田上大路町遺跡』 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2019-12　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2020年
8	吉田近衛町26番地53他（市立近衛中学校内）	2020	埋文研	鎌倉時代の建物、門、溝、井戸。室町時代の土坑など。	790	本報告

※ 府教委…京都府教育委員会、埋文研…京都市埋蔵文化財研究所、文博…京都文化博物館、京大…京都大学埋蔵文化財研究センター。

３．遺　　構

（１）基本層序

調査地は、近衛中学校の体育館跡地であり、調査区の周囲の北・南・西側壁面はコンクリート基礎が巡っている。また、調査区の東側は昨年度調査区と重複しているため、壁面土層の記録が残せたのは調査区の南東隅の一部にとどまる。以下、調査区の基本層序を述べる。

調査地の地表面は、標高約51.6ｍで平坦である。地表下0.7ｍまでが現代盛土、その直下から約0.3ｍが室町時代の整地層（上面が第１遺構面）、その直下から約0.4～0.5ｍが鎌倉時代の整地層（上面が第２遺構面）、そして地山（上面が第３遺構面）と続く。

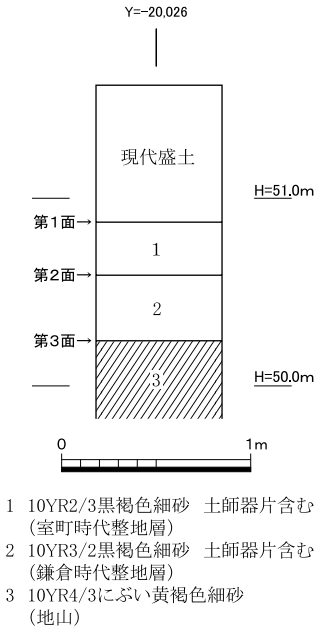


図６　土層柱状図（１：40）

（２）遺構の概要

調査で検出した遺構総数は、864基である。調査は、上述した３面に分けて行い、第１面では室町時代以降、第２面では鎌倉時代、第３面では平安時代末期から鎌倉時代初頭の遺構を検出した。第２面で検出した遺構数が最も多い。以下、各調査面ごとに主要な遺構について述べる。

（３）第３面〔平安時代末期から鎌倉時代初頭〕の遺構（図版１・９）

柱列１（図７、図版10）　調査区中央、後述する砂取土坑の底面で検出した東西方向の柱列である。柱間は約2.1ｍである。柱穴の平面形は楕円形を呈し、柱穴795は径約1.1ｍ、深さ約0.6ｍ、柱穴794は径約0.8ｍ、深さ約0.6ｍである。柱穴795では西方向に柱を抜き取った痕跡を確認した。遺構の主軸方位は、東に対して約10度南に振れる。埋土からは土師器が多量に出土しており、時期は12世紀末から13世紀初頭である。

土坑384（図版４）　調査区北東部で検出した。検出規模は、径約1.3ｍ、深さ約1.0ｍである。地

表２　遺構概要表

時　　代	遺　　構	備　　考
平安時代末期 ～鎌倉時代初頭	柱列１、土坑305・384・388・390・406・703・839、 砂取土坑群Ⅰ～Ⅲなど	第３面
鎌倉時代	建物１、門１～３、塀１・２、布掘り塀596・664、 井戸544・669、溝300・368・638、瓦溜り164、 土坑170・369・587など	第２面
室町時代以降	土坑30・602など	第１面

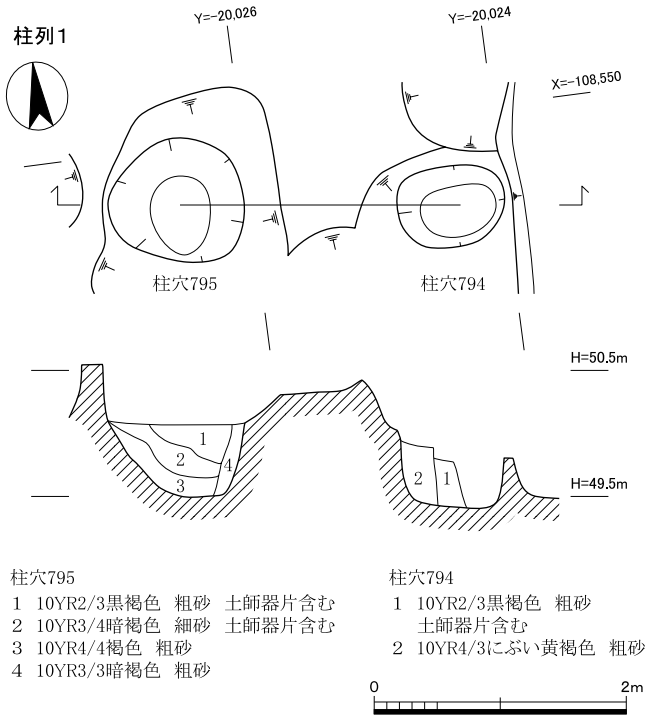


図７　柱列１実測図（１：60）

山が砂質土から粘土に変わる直上付近で掘り止めており、水溜などの貯蔵施設として利用された可能性が考えられる。出土した遺物の時期は、12世紀末から13世紀初頭である。

土坑388（図版４・10）　調査区中央部東寄りで検出した。検出規模は、径約1.7ｍ、深さ約1.0ｍである。地山が砂質土から粘土に変わる直上付近で掘り止めており、水溜などの貯蔵施設として利用された可能性が考えられる。出土した遺物の時期は、12世紀末から13世紀初頭である。

土坑390（図版４・10）　調査区中央部、砂取土坑383の底面で検出した。検出規模は、径約1.8ｍ、深さ約1.3ｍである。地山が砂質土から粘土に変わる直上付近で掘り止めており、水溜などの貯蔵施設として利用された可能性が考えられる。出土した遺物の時期は、12世紀末から13世紀初頭である。

土坑406（図版４）　調査区北側で検出した方形の土坑である。規模は、東西約1.1ｍ、南北約1.5ｍ、深さ約1.0ｍである。出土した遺物は、細片のみで時期の詳細は不明だが、重複関係から砂取土坑よりも古い。

土坑839　調査区南西部で検出した方形の土坑である。規模は、東西約1.2ｍ、南北約1.7ｍ、深さ約0.3ｍである。

土坑305（図版４・10）　調査区の北東部、砂取土坑群Ⅱと重複して検出した。東西約1.2ｍ、南北約1.1ｍ、深さ約0.2ｍである。土師器などの土器類が多量に出土しており、土器などの廃棄土坑と考えられる。出土した遺物の時期は、12世紀末から13世紀初頭である。

土坑703　調査区中央西端で検出した。検出規模は、南北1.1ｍ以上、東西0.6ｍ以上、深さは約0.4ｍである。土師器と土製円塔が出土した。出土した遺物の時期は、12世紀末から13世紀初頭である。

砂取土坑群（図８）　砂取土坑群は第２面で検出した溝638以北に集中しており、連続して砂取が行われたものと、単独で行われたものとの２種類がある。連続で行われたものは、まとめて土坑群Ⅰ～Ⅲとした。ただⅠとⅡは間を第２面の溝300に削平されており、別々と考えたが、同一作業単位の可能性もある。その他は単独で行われたものである。

ここでは、代表として、調査区北端で検出した土坑群Ⅱについて述べる。この土坑群は、底部の形状から８つの単位に分けることができる。深さは検出面から約0.4～0.6ｍである。これらの土坑

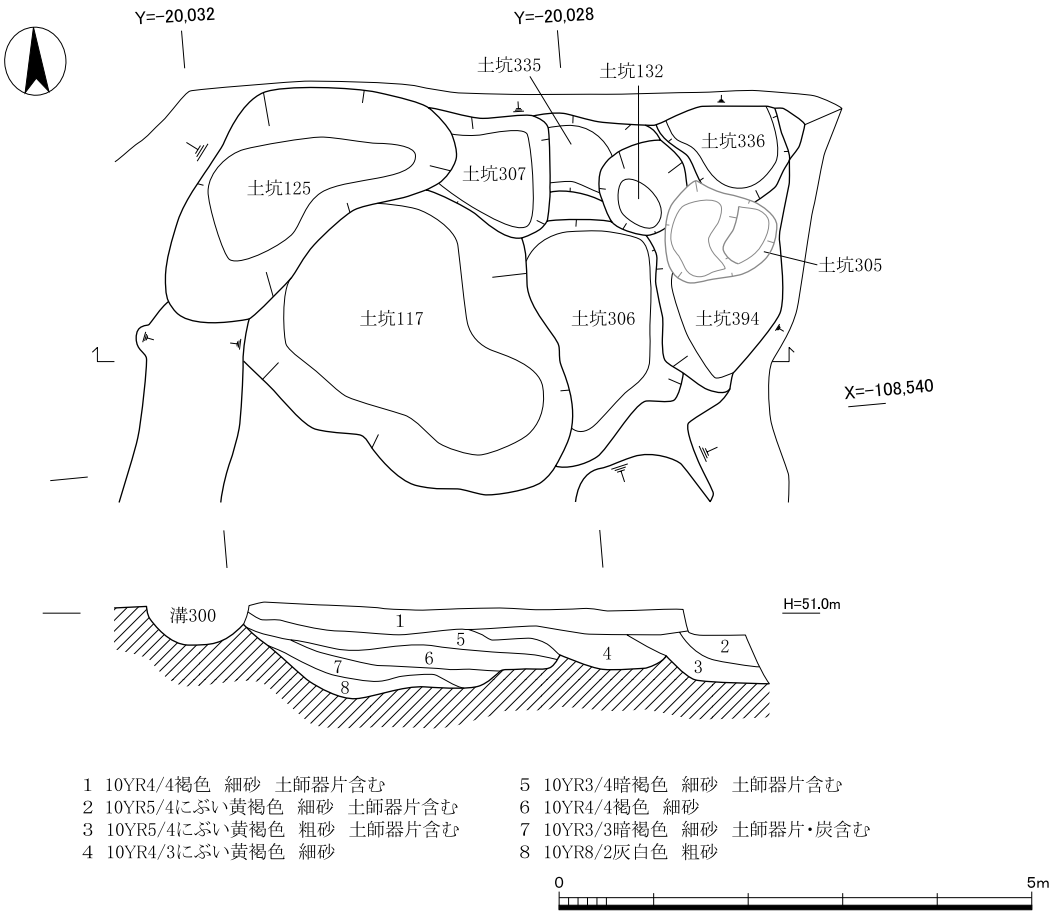


図８　砂取土坑群Ⅱ実測図（１：80）

は、平面形が不定形であり、遺構底面が白色細砂のいわゆる白川砂から黒褐色細砂に変化する辺りで掘り止められている。こうした点から、これらの土坑は白川砂の採取を目的とした砂取土坑であると考えられる。出土した遺物の時期は、12世紀末から13世紀初頭である。

（４）第２面〔鎌倉時代〕の遺構（図版２・11）

第２面では、建物１や門１～３、塀１・２、溝300・368・638、布掘り塀596・664、井戸544・669、瓦溜り164、土坑587などを検出している。また、調査区の北東部では、多数の柱穴群を検出しており、小規模な建物が複数回建て替えられた可能性が考えられるが、建物としては復元できなかった。

建物１（図版５）　調査区の南部で検出した東西３間（約5.5ｍ）、南北４間（約7.6ｍ）の総柱の掘立柱建物である。柱間は不等間で、東西は東側の一間が約1.2ｍ、中央・西側の二間が2.1～2.2ｍ、南北が約1.8～2.0ｍである。建物の方位は、北に対して約14度東に振れる。建物１の周囲では他にも複数の柱穴を検出しており、複数回の建て替え、もしくは柱の据え替えが行われたと考えられる。土師器細片のみが出土しており、詳細な時期は不明である。

門１（図９、図版12）　調査区中央西端で検出した柱穴356・675からなる南北方向の掘立柱の門である。柱間は約2.1ｍである。柱穴356は、上層が溝300・368や土坑388により削平されており、

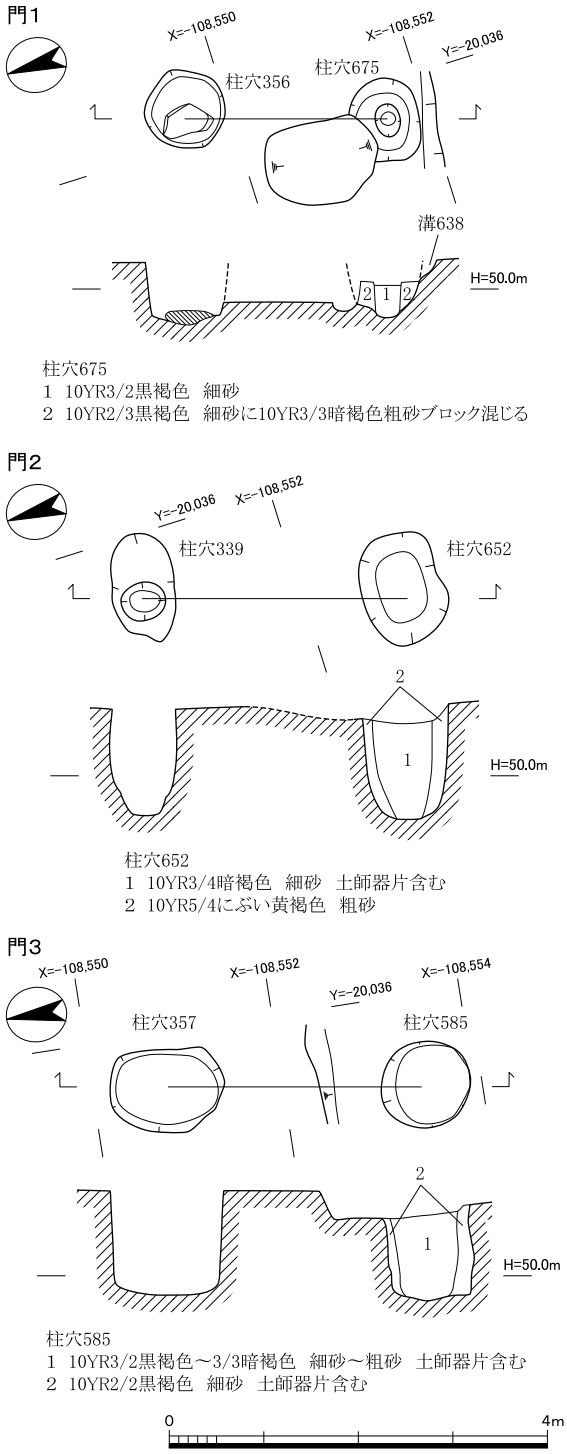


図９　門１～３実測図（１：80）

底面のみの検出であったが、径約0.6ｍで、底部に約0.5ｍの礎石を据えている。柱穴675は径約0.8ｍ、深さ約0.4ｍで、柱当り部分の底面がわずかに窪む。遺構の主軸方位は、北に対して約15度東に振れる。門の構造は、控柱の柱穴が確認できなかったため、棟門か冠木門であったと考えられる。

門２（図９、図版12）　調査区中央西端で検出した柱穴339・652からなる南北方向の掘立柱の門である。検出面では、西半を溝300により削平される。柱間は約2.7ｍである。柱穴339は、径約0.7ｍ、深さ1.1ｍで、底面に柱当たりと考えられる径0.4～0.5ｍの窪みが存在する。柱穴652は、径約0.9ｍ、深さ約1.2ｍである。柱の太さは径0.3～0.6ｍである。遺構の主軸方位は、北に対して約15度東に振れる。門の構造は、控柱の柱穴が確認できなかったため、棟門か冠木門であったと考えられる。出土した遺物の時期は13世紀前半頃である。

門３（図９、図版12）　調査区中央西端で検出した柱穴357・585からなる南北方向の掘立柱の門である。柱間は約2.7ｍである。柱穴357は径約1.1ｍ、深さ約1.1ｍである。柱穴585は、径約0.9ｍ、深さ約1.0ｍである。柱の太さは、径約0.55ｍである。遺構の主軸方位は、北に対して約10度東に振れる。門の構造は、控柱の柱穴が確認できなかったため棟門か冠木門であったと考えられる。出土した遺物の時期は13世紀前半ごろである。

塀１（図版６）　門３に取り付くと考えられる南北方向の掘立柱の塀である。門より南側では、遺構面が後世の削平を受けて失われていたため確認できなかった。柱間は不等間で1.0～2.5ｍである。柱穴は径0.3～0.4ｍで、深さは検出面から約0.1ｍである。遺構の主軸方位は、北に対して約15度東に振れる。

塀２（図版６）　門２に取り付く南北方向の掘立柱の塀である。門より北側では確認できなかった。柱間は不等間で0.5～3.0ｍである。柱穴は径0.3～0.5ｍで、深さは検出面から約0.3ｍである。

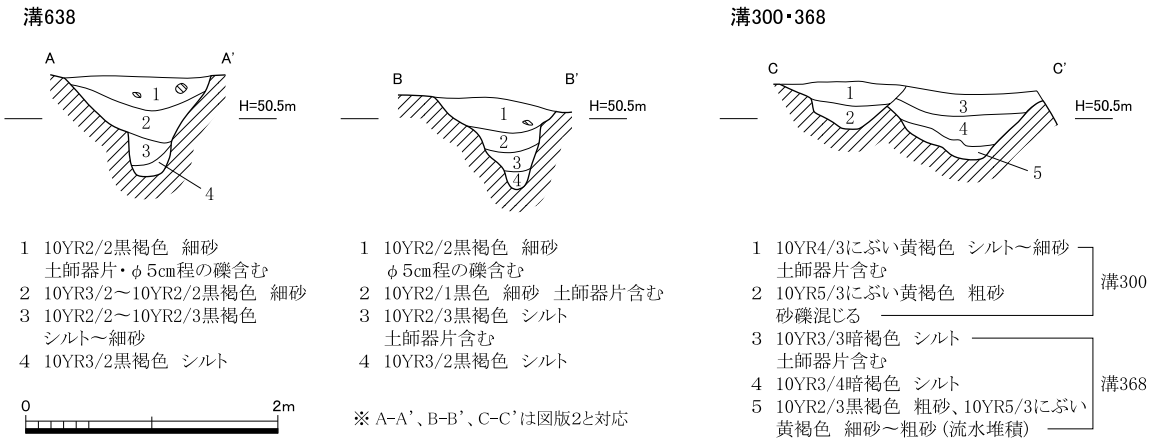


図10　溝300・368・638断面図（1：60）

遺構の主軸方位は、北に対して約18度東に振れる。

溝300（図10、図版12）　調査区の西端で検出した南北方向の溝である。延長約25ｍを検出し、南北ともに更に延びる。幅0.9～1.1ｍ、深さは約0.4ｍである。遺構の主軸方位は、北に対して約15度東に振れる。断面形は浅いＶ字形である。

溝368（図10、図版12）　調査区の西端で検出した南北方向の溝である。検出規模は、南北19ｍ以上、幅約1.2ｍ、深さ約0.5ｍである。遺構の主軸方位は、北に対して約18度東に振れる。調査区の北半では溝300と完全に重複し、削平される。底部にはラミナが見られ、溝底部は北から南に向かって傾斜することから、北から南へ流水していたと考えられる。断面形は浅いＶ字形である。

溝638（図10、図版12）　調査区の中央で検出した東西方向の溝である。検出規模は、東西約21ｍ以上、幅約1.0ｍで、深さは約0.8ｍである。遺構の主軸方位は、東に対して約10度南に振れており、溝300・368にほぼ直交する。断面形は東半部では浅いＶ字形、西半部では２段落ちとなり、下部は箱型を呈する。

井戸544（図11、図版14）　調査区東端で検出した円形石組の井戸で、前年度調査で検出した井戸238と同遺構である。掘形の径約3.3ｍ、石組の内法約1.0ｍ、深さは検出面から約2.8ｍである。石組の下部では方形横桟組の井戸枠が一部残存している。使用された木材はスギとヒノキ属である。

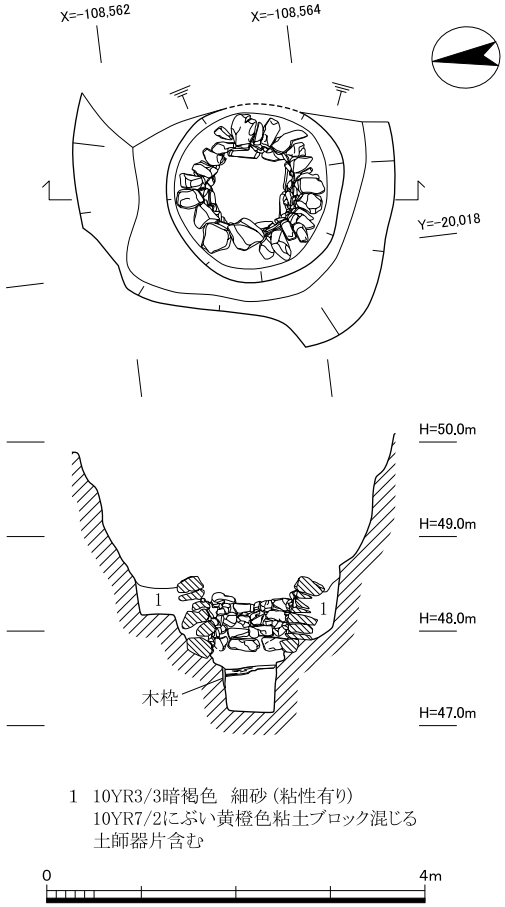


図11　井戸544実測図（1：80）

井戸669（図版７・13）　調査区東端で検出した円形石組の井戸である。掘形は径約5.5ｍ、石組の内法は0.7～0.8ｍ、深さは検出面から約3.4ｍである。掘形は、断面形が階段状を呈している。検出面では径約5.5ｍと大きく掘られているが、下方に向かうに従い径は小さくなる。石組の下部では、方形横桟組の木枠がわずかに残存し、底部には円形の水溜の痕跡を確認した。井戸枠に使用された木材はヒノキ属である。また、石組の上部にも、残存はしていないが木枠などの構築物があったと考えられる。出土した遺物の時期は13世紀代である。

布掘り塀596（図版８）　調査区の南部で検出した東西方向の布掘り塀である。東西約3.6ｍ、南北約0.6ｍ、深さ約0.8ｍである。柱据え付け痕は確認できなかったが、後述する布掘り塀664と幅や深さが近似しているという点から布掘り塀と考えた。

布掘り塀664（図版８・14）　調査区の南端で検出した東西方向の布掘り塀である。東西3.6ｍ以上、南北約0.6ｍ、深さ約0.8ｍで、東側は撹乱により削平される。底部では柱の据え付け痕跡を２基確認した。柱根の痕跡は径約0.2ｍである。

瓦溜り164（図版８・14）　調査区の中央で検出した。北側、南側は削平されるが、平面形は東西約2.1ｍ、南北約1.4ｍ以上の隅丸方形で、深さ約0.4ｍである。断面形は擂鉢状を呈する。12世紀末から13世紀代の土器類の小片と軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦がまとまって出土した。

土坑170　調査区中央で検出した。検出規模は、南北約0.8ｍ、東西約0.9ｍ、深さ約0.2ｍである。軒丸瓦が出土した。

土坑369　調査区中央で検出した。検出規模は、南北約1.0ｍ、東西約1.1ｍ、深さ約0.3ｍである。常滑産焼締陶器が出土した。

土坑587（図版８）　調査区の南西部で検出した。西側は削平を受けており、規模は、東西2.5ｍ以上、南北約3.0ｍ、深さ約1.9ｍである。標高およそ49.25ｍ以下では地山が粘土質となり、また掘形は形状を変え、東西約0.8ｍ、南北約1.4ｍの長方形を呈する。底面の地山が粘土質であることから井戸とは考えにくい。出土した遺物の時期は14世紀前半である。

（５）第１面〔室町時代以降〕の遺構（図版３・15）

第１面では、柱穴や土坑を多数検出している。柱穴の掘形の形状から、大きく円形と方形の２つに分けることができる。時期は遺物から、円形のものが室町時代、方形のものが江戸時代と考えられる。

土坑30（図12）　調査区の北西部で検出した。径約0.8ｍ、深さ約0.3ｍである。

土坑602　調査区南西部で検出した。検出規模は、長辺約1.4ｍ、短辺約0.7ｍ、深さ約0.4ｍである。土師器片、軒平瓦などが出土した。

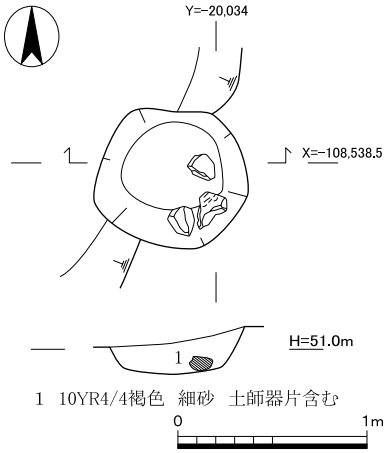


図12　土坑30実測図（１：40）

４．遺　　物

（１）遺物の概要

遺物は整理コンテナで70箱出土した。出土遺物には、土器類、瓦類、土製品、石製品、金属製品がある。そのうちのほとんどが土器類で、その他瓦類が少量、土製品・石製品・金属製品がごく少量ある。時代は、平安時代末期・鎌倉時代・室町時代・江戸時代・近代のものがあり、平安時代末期から鎌倉時代のものが大部分で、これ以降のものは少量であり、また小片のため図化できるものはない。

以下、遺構一括出土の資料を中心に報告する。なお、土師器の型式・年代観については平尾政幸氏の編年に拠った[1)]。

（２）土器類（図13・14、図版16・17）

柱列１出土土器（１～９）　すべて赤色系の土師器の皿Ｎで、大小の２種に分けることができる。１～３は小型のもので、口径8.4～9.0㎝、器高1.6～1.9㎝である。４～９は大型のもので、口径13.4～14.6㎝、器高2.5～2.9㎝である。６Ａに位置づけられる。

土坑388出土土器（10～17）　すべて赤色系の土師器の皿Ｎで、大小の２種に分けることができる。10～13は小型のもので、口径8.5～8.8㎝、器高1.3～1.7㎝である。14～17は大型のもので、口径13.7～15.1㎝、器高2.4～2.8㎝である。15・16には口縁部外面に煤が付着する。６Ａに位置づけられる。

土坑384出土土器（18～25）　すべて赤色系の土師器の皿Ｎで、大小の２種に分けることができる。18～21は小型のもので、口径8.6㎝、器高1.2～1.5㎝である。22～25は大型のもので、口径12.7～13.4㎝、器高2.2～3.1㎝である。６Ａに位置づけられる。

表３　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
平安時代	土師器、瓦類、土製品、石製品		土師器65点、瓦類２点、土製品１点、石製品１点		
鎌倉時代	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類		土師器41点、焼締陶器１点、輸入陶磁器１点、瓦類21点		
室町時代	土師器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類、金属製品				
江戸時代以降	土師器、陶磁器				
合　計		74箱	133点（５箱）	０箱	69箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より４箱多くなっている。

土坑390出土土器（26～34）　すべて赤色系の土師器の皿Ｎで、大小の２種に分けることができる。26～31は小型のもので、口径8.6～9.1㎝、器高1.3～1.8㎝である。31～34は大型のもので、口径12.9～13.4㎝、器高2.3～2.9㎝である。６Ａに位置づけられる。

土坑703出土土器（35～42）　すべて赤色系の土師器の皿Ｎで、大小の２種に分けることができる。35～39は小型のもので、口径8.3～9.2㎝、器高1.5～2.0㎝である。40～42は大型のもので、

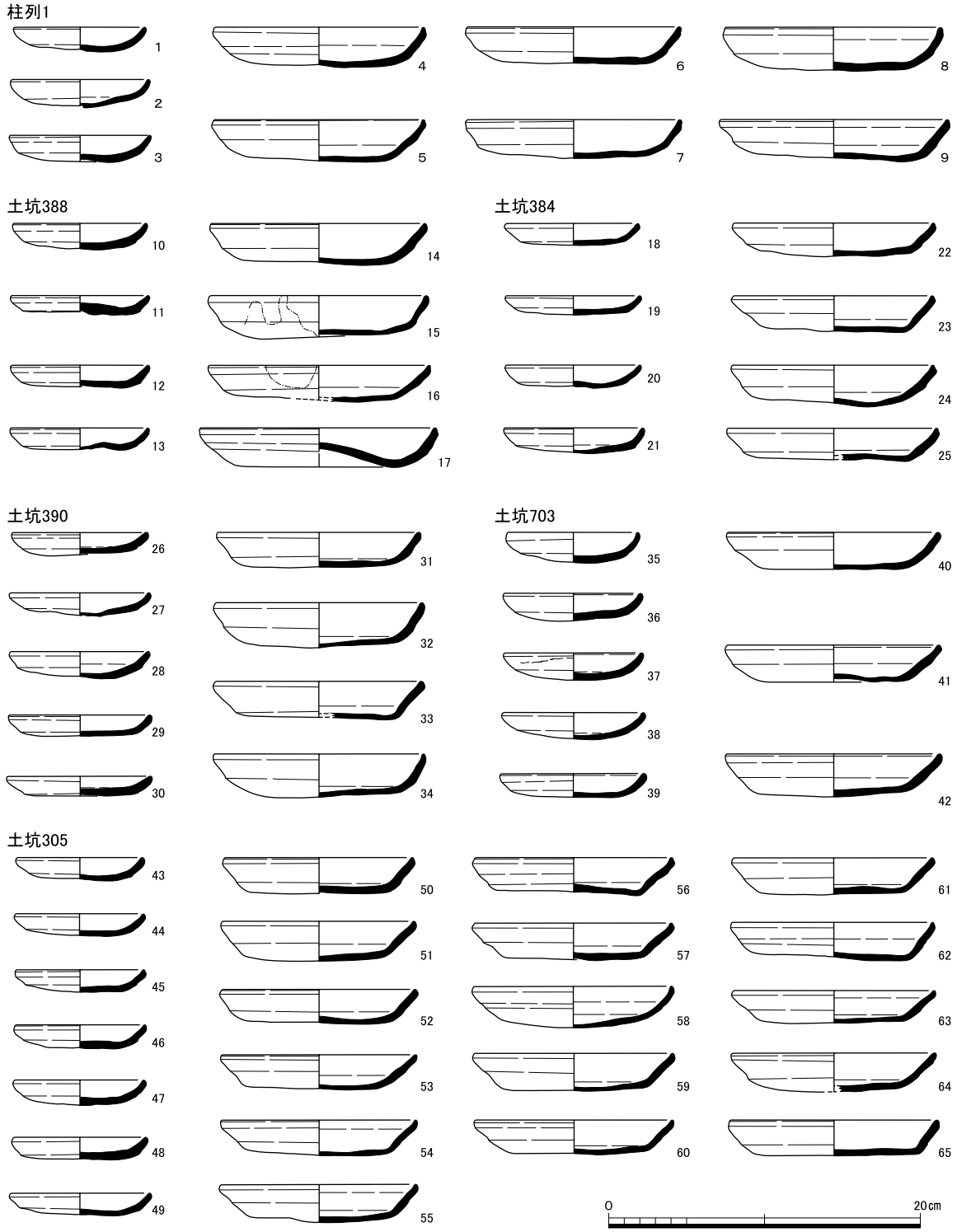


図13　出土土器類実測図１（１：４）

口径13.4～13.6㎝、器高2.4～2.7㎝である。６Ａに位置づけられる。

土坑305出土土器（43～65）　すべて赤色系の土師器の皿Ｎで、大小の２種に分けることができる。43～49は小型のもので、口径8.1～8.9㎝、器高1.4～1.7㎝である。50～65は大型のもので、口径12.0～13.2㎝、器高2.1～2.8㎝である。６Ａに位置づけられる。

溝300出土土器（66～69）　66～68は土師器の皿Ｎである。66・67は小片のため口径は不明で

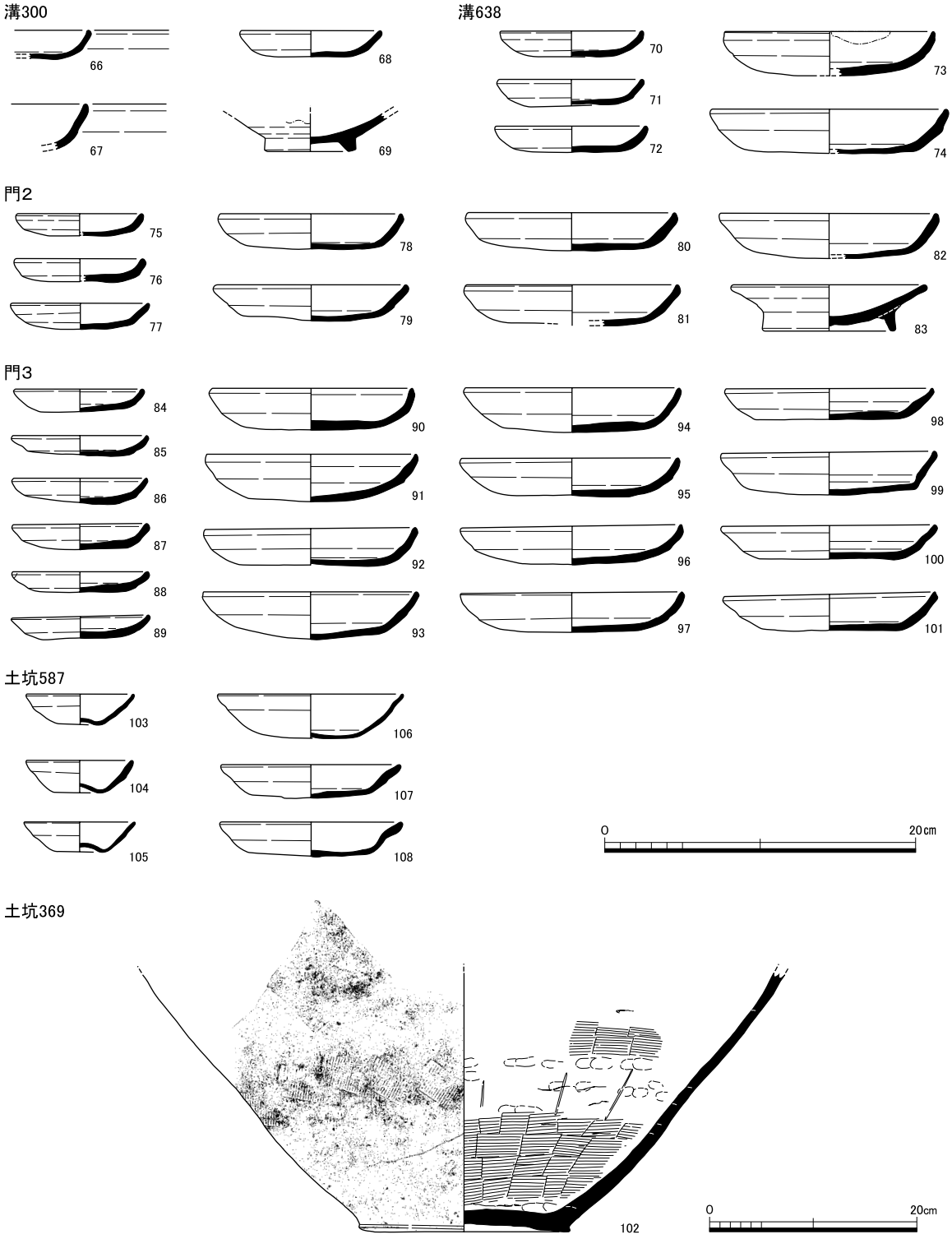


図14　出土土器類実測図２（１：４、102のみ１：６）

ある。68は小型の皿で、口径9.0㎝、器高1.8㎝である。69は輸入陶磁器で白磁の椀である。削り出し高台で、底径5.2㎝である。内面には施釉するが、底部外面には施釉しない。６Ａに位置づけられる。

溝638出土土器（70～74）　すべて赤色系の土師器の皿Ｎで、大小の２種に分けることができる。70～72は小型のもので、口径9.1～9.7㎝、器高1.7～1.8㎝である。73・74は大型のもので、73は口径13.4㎝、器高2.8㎝で、口縁内部に煤が付着する。74は口径15.1㎝、器高2.8㎝である。６Ａに位置づけられる。

門２出土土器（75～83）　75～82は赤色系の土師器の皿Ｎで、大小の２種に分けることができる。75～77は小型のもので、口径8.0～8.8㎝、器高1.4～1.7㎝である。78～82は大型のもので、口径11.6～13.9㎝、器高2.3～2.9㎝である。83は高い高台がつく土師器皿である。口径12.6㎝、器高3.0㎝。貼り付け高台。６Ａに位置づけられる。

門３出土土器（84～101）　すべて赤色系の土師器の皿Ｎで、大小の２種に分けることができる。84～89は小型のもので、口径8.2～8.9㎝、器高1.5～1.7㎝である。90～101は大型のもので、口径12.9～14.1㎝、器高2.0～3.1㎝である。６Ａ～６Ｂに位置づけられる。

土坑369出土土器（102）　102は焼締陶器の甕である。底径20.0㎝、残存高24.8㎝である。内面は板状工具によるナデと指ナデ、外面はナデのち格子状のタタキが施される。常滑産。13世紀代。

土坑587出土土器（103～108）　103～105は白色系の皿Sh、いわゆるへそ皿である。底部の盛り上がりは大きくはない。口径6.9～7.1㎝、器高1.9～2.1㎝。106は白色系の皿Ｓである。口径11.9㎝、器高2.8㎝。107・108は皿Ｎである。107は口径11.5㎝、器高2.2㎝、108は口径11.6㎝、器高2.3㎝である。７Ｃに位置づけられるため南北朝期の遺物である可能性がある。

（３）瓦類（図15、図版18）

軒瓦は23点出土しており、瓦１～９は軒丸瓦、瓦10～23は軒平瓦である。半数以上が瓦溜り164からの出土である。時期は、瓦10・11が平安時代後期、その他は平安時代末期から鎌倉時代である。

軒丸瓦

瓦１は右巻三巴文軒丸瓦である。巴文の頭は互いに離れ、尾も接しない。瓦当裏面オサエ。胎土は密で、径1.3㎝以下の長石・石英・チャートを含む。色調はＮ5/0灰色。山城産。瓦溜り164から出土した。

瓦２は右巻三巴文軒丸瓦である。巴文の頭は互いに離れ、尾も接しない。瓦当裏面オサエ。胎土は密で、径0.3㎝以下の長石・石英・雲母を含む。色調はＮ4/0灰色。山城産。井戸544から出土した。

瓦３は右巻三巴文軒丸瓦である。巴文の頭は互いに離れ、尾は接するが圏線状にはならない。巴文の外側に圏線が一条。外区には珠文が巡る。瓦当裏面オサエ。胎土は密で、径0.5㎝以下の長石・石英・チャートを含む。色調はＮ4/0灰色。山城産。瓦溜り164から出土した。

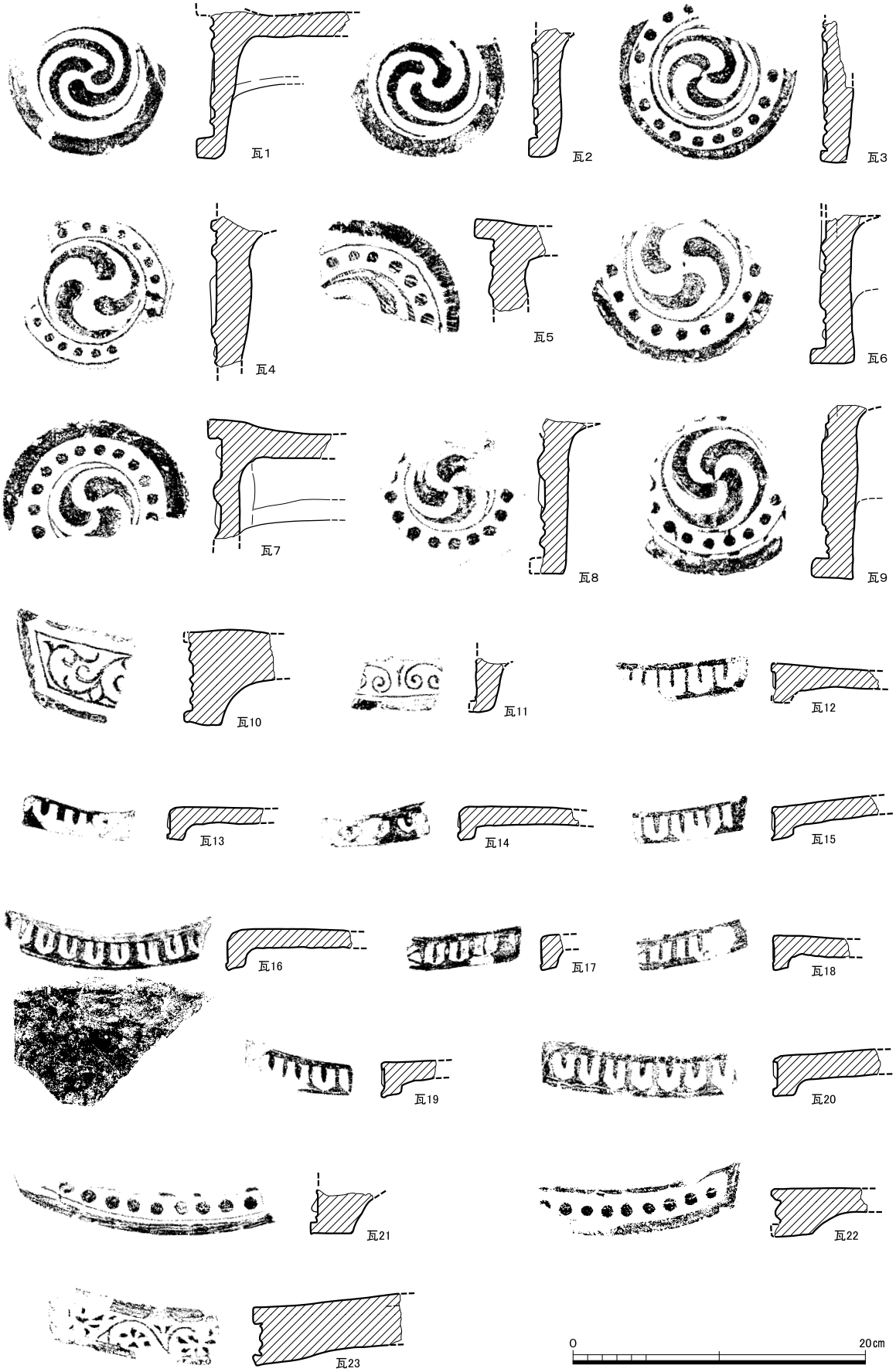


図15　出土瓦類拓影及び実測図（１：４）

瓦４は右巻三巴文軒丸瓦である。巴文の頭は互いに離れ、尾も接しない。巴文の外側に圏線が二条、その間に珠文が巡る。瓦当裏面オサエ。胎土は密で、径0.35㎝以下の長石・石英・チャートを含む。色調はＮ4/0灰色。山城産。瓦溜り164から出土した。

瓦５は右巻巴文軒丸瓦である。巴文の尾が接する。外区には珠文が巡り、さらにその外側に圏線が一条巡る。瓦当部表面に木目が残る。瓦当裏面平滑なナデ。胎土は密で、径0.3㎝以下の長石・石英・チャートを含む。色調はＮ5/0灰色。和泉産。第２面整地層から出土した。

瓦６は左巻三巴文軒丸瓦である。巴文の頭は互いに離れ、尾は接し圏線をなす。外区には珠文が巡る。瓦当部表面には離れ砂が付着する。瓦当裏面平滑なナデ。胎土は密で、径0.25㎝以下の長石・石英・チャートを含む。色調はＮ4/0灰色。和泉産。瓦溜り164から出土した。

瓦７は左巻三巴文軒丸瓦である。巴文の頭は互いに離れ、尾は接し圏線をなす。外区には珠文が巡る。瓦当裏面平滑なナデ。胎土は密で、径0.3㎝以下の長石・石英・チャートを含む。色調はＮ5/0灰色。和泉産。瓦溜り164から出土した。

瓦８は左巻三巴文軒丸瓦である。巴文の頭は互いに離れ、尾は接し圏線をなす。外区には珠文が巡る。瓦当裏面平滑なナデ。胎土は密で、径0.15㎝以下の長石・石英・チャート・雲母を含む。色調はＮ4/0灰色。和泉産。溝300から出土した。

瓦９は左巻三巴文軒丸瓦である。巴文の頭は互いに離れ、尾も接しない。外区には珠文が巡り、さらにその外側に圏線が一条巡る。瓦当裏面平滑なナデ。胎土は密で、径0.3㎝以下の長石・チャート・雲母を含む。色調はＮ5/0灰色。和泉産。土坑170から出土した。

軒平瓦

瓦10は唐草文軒平瓦である。瓦当部表面、顎部、平瓦部凹面には自然釉が付着する。包み込み技法。胎土は密で、径0.2㎝以下の長石・石英・黒色粒子を含む。色調はＮ3/0暗灰色。播磨産。第２面整地層から出土した。

瓦11は唐草文軒平瓦である。中心飾りは下向きＣ字形を並列する。胎土は密で、径0.1㎝以下の長石・チャート・雲母を含む。色調はＮ5/0灰色。播磨産。第１面整地層から出土した。

瓦12は剣頭文軒平瓦である。折り曲げ技法。頭部ナデあり。胎土は密で、径0.3㎝以下の長石・石英・チャートを含む。色調はＮ6/0灰色。山城産。瓦溜り164から出土した。

瓦13は剣頭文軒平瓦である。折り曲げ技法。頭部ナデあり。胎土は密で、径0.25㎝以下の長石・チャートを含む。色調はＮ5/0灰色。山城産。瓦溜り164から出土した。

瓦14は剣頭文軒平瓦である。折り曲げ技法。平瓦境に凹型台圧痕あり。胎土は密で、径0.5㎝以下の長石・石英・チャートを含む。色調はＮ5/0灰色。山城産。瓦溜り164から出土した。

瓦15は剣頭文軒平瓦である。折り曲げ技法。頭部ナデあり。胎土は密で、径0.25㎝以下の長石・石英・チャートを含む。色調はＮ6/0灰色。山城産。瓦溜り164から出土した。

瓦16は剣頭文軒平瓦である。折り曲げ技法。平瓦部凸面に「X」字状のヘラ記号が残る。平瓦境に凹型台圧痕あり。胎土は密で、径0.1㎝以下の長石・石英を含む。色調はＮ6/0灰色。山城産。瓦溜り164から出土した。

瓦17は蓮華剣頭文軒平瓦である。折り曲げ技法。平瓦境に凹型台圧痕あり。胎土は密で、径0.25cm以下の長石・石英・チャートを含む。色調はN 5/0灰色。山城産。瓦溜り164から出土した。

瓦18は剣頭文軒平瓦である。折り曲げ技法。平瓦境に凹型台圧痕あり。胎土は密で、径0.2cm以下の長石・チャートを含む。色調はN 6/0灰色。山城産。瓦溜り164から出土した。

瓦19は剣頭文軒平瓦である。折り曲げ技法。平瓦境に凹型台圧痕あり。胎土は密で、径0.8cm以下の長石・チャートを含む。色調はN 6/0灰色。山城産。瓦溜り164から出土した。

瓦20は剣頭文軒平瓦である。折り曲げ技法。頭部ナデあり。胎土は密で、径0.75cm以下の長石・チャートを含む。色調はN 5/0灰色。山城産。溝300から出土した。

瓦21は連珠文軒平瓦である。内・外区境に界線がある。顎貼り付け技法。胎土は密で、径0.4cm以下の長石・チャートを含む。色調はN 4/0灰色。和泉産。現代盛土から出土した。

瓦22は連珠文軒平瓦である。顎貼り付け技法。胎土は密で、径0.3cm以下の長石・石英・チャートを含む。色調はN 6/0灰色。和泉産。土坑602から出土した。

瓦23は唐草文軒平瓦である。胎土は密で、径0.4cm以下の長石・チャートを含む。色調はN 4/0灰色。産地不明。現代盛土から出土した。

（4）土製品・石製品（図16、図版18）

土製品

土１は土製円塔である。鍔部は欠損する。径5.0cm、高さ2.6cm。半球上部に緑釉が施される。中実である。土坑703から出土した。

石製品

石１はえぐりこみの小さい木瓜形の硯である。陸部の一部と海部が欠損する。幅7.7cm。残存長9.5cm。砂取土坑群Ⅱの土坑117から出土した。

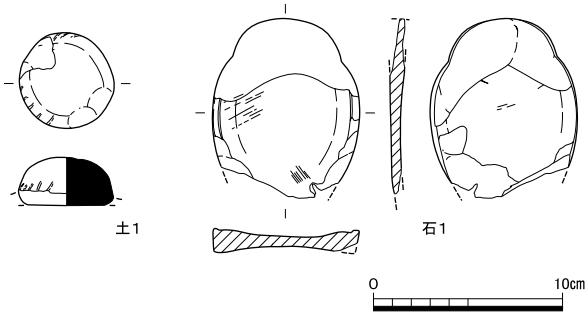
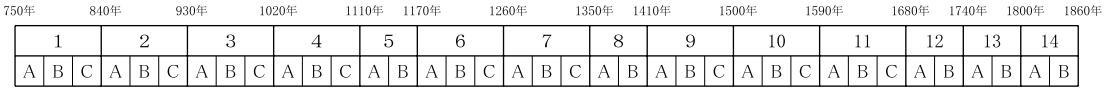


図16　出土土製品・石製品実測図（１：４）

註

１）　平尾政幸「土師器再考」『洛史　研究紀要　第12号』　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2019年



5．まとめ

今回の調査では、主に平安時代末期から鎌倉時代（12世紀末から14世紀前半頃）の遺構を検出した。以下で、既往の調査成果も含めて、今回の調査成果をまとめる。

今回検出した遺構は、時期別にみると12世紀末から13世紀初頭の柱列１や土坑384・388・390、砂取土坑群など、13世紀代の建物１、門１～３、井戸544・669、溝300・368・638、瓦溜り164など、14世紀前半の土坑587などである。

第２面で検出した溝300・368は南北方向の溝で、1981年度の調査で検出した南北方向の溝124とつながると考えられる。また、この溝は東隣の2019年度調査で検出した南北方向の溝329と同時期で、今回調査の溝300の方がやや東へ振れるが同様の傾きをしている。この溝の間は約24ｍであり、建物１や井戸544・699などが存在する。また、溝300・368付近では南北方向に２基の柱穴が並ぶ門を３基検出した。門はいずれも棟門か冠木門と考えられる。これらの門１～３と溝300・368には大きな時期差は認められず、13世紀前半に複数回の造り替えが行われたと考えられる。さらに、門１～３の間を通るように、溝300・368とほぼ直交する東西方向の溝638が存在する。この溝638は、調査区中央から西側では２段落ちとなり、その断面形状は箱型を呈する。門の間を通ることから、機能時は上層が埋められて暗渠溝となっていたとも考えられるが、今回の調査では詳細な性格や機能については明らかにすることができなかった。

次に周辺での既往の調査成果についてみていく。まず、1977年度に今回の調査区北東で行われた

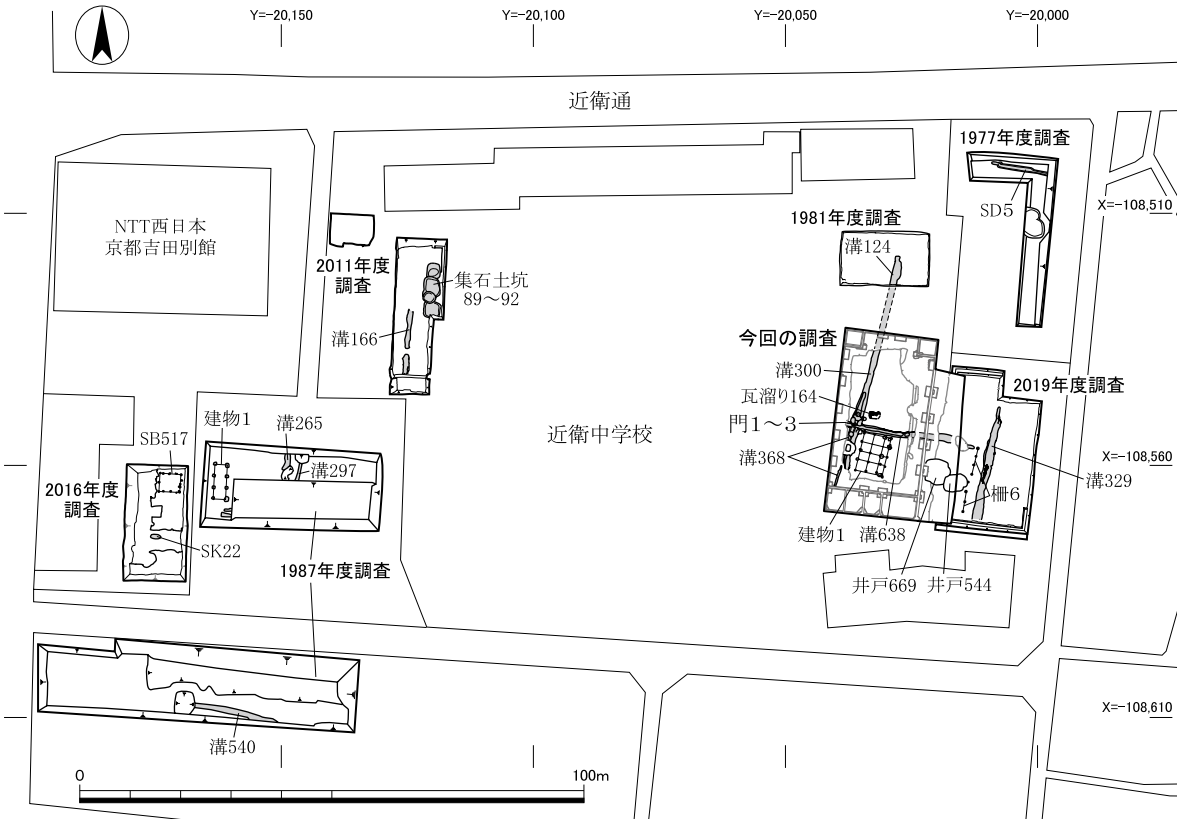


図17　近衛中学校周辺調査主要遺構図（１：1,500）

調査では、中世の東西溝SD５がある。上部が後世の遺構により削平され、底部がわずかに残存するのみで、詳細な時期も不明である。遺構の主軸方位は、東に対して約11度南に振れる。その他は室町時代の廃棄土坑などで、特筆すべきものはない。次に、1981年度に今回の調査区の北側で行われた調査では、南北方向の溝SD124を検出している。時期は鎌倉時代である。この溝は今回検出した溝300・368の北延長線上に位置しており、同一の溝と考えられる。1987年度に近衛中学校の南西で行われた調査では、鎌倉時代の南北棟建物や東西方向の溝540を検出している。溝540の主軸方位は、東に対して約８度南に振れる。2011年度に近衛中学校の北西部で行われた調査では、鎌倉時代（13世紀中頃から後半）の集石土坑89～92や南北方向の溝166などを検出している。集石土坑はわずかに東に振れるがほぼ正方位にならぶ。また溝166は、北に対して東に約4.5度振れる。2016年度に行われた調査では、鎌倉時代（13世紀後半）の東西棟の建物１棟、土壙墓SK22などを検出している。建物の方位は、北に対して東に約３度振れている。最後に、2019年度に行われた調査では、上述した鎌倉時代（13世紀初頭）の南北方向の溝329や南北方向の柵６などを検出している。溝329は北に対して約11度、柵６は北半が約12度、南半は約10度東に振れる。

以上、周辺での既往の調査成果を遺構方位を中心に見てきた。まず時期としては13世紀初頭以降、主に鎌倉時代の遺構が確認されている。また遺構の主軸方位は、吉田山山麓に近い東側では傾きが10度以上あるのに対して、西側では北に対して東へ約4.5度と傾きが小さくなっていることがわかる。

今回の調査地の近衛中学校は福勝院の推定地とされている。史料から福勝院の創建時期については、仁平元年（1151）であることがわかっている[1)]。しかしながら、既往の調査成果をみても、創建期である12世紀中頃までさかのぼる遺構は確認されていない。この状況は今回の調査でも同様である。ただし、1977年度や2019年度の調査などで平安時代末期から鎌倉時代の瓦が一定量出土しており、今回の調査でも瓦溜り164から同時期の瓦が一定量出土している。これらの点から、調査地周辺には瓦葺の建物があったと推測される。さらに、今回検出した井戸669は、掘形が径約5.5ｍ、深さ約3.4ｍ、また用いられている石材が約0.5ｍと大きく、通常の宅地の井戸とは様相が異なる。こうした点から、今回の調査でも福勝院と直接関連する遺構は検出できなかったものの、当地に寺院に類する施設があった可能性を考えることはできる。今回の調査を含め、これまでの調査成果から当地と福勝院の関係を認めることは困難であり、当地と福勝院との関係については今後の課題である。

次に、福勝院を考える上で重要な近衛大路末について考えていく[2)]。まず、白河街区の地割については不明な部分が多いため、複数の復原案が提示されている。今回、現代の地図と白河街区の復原案を重ねて提示されている２例を見ていく。杉山信三氏は、近衛大路末を現在の近衛通から南に約70ｍの位置で復原している[3)]。一方で、濱崎一志氏は調査成果に加え、字境界や古道も考慮に入れて街区の復原を行っており、近衛大路末は現在の近衛通と一致する位置に復原している[4)]。とすれば、福勝院の推定地は現在の京都大学吉田キャンパス南西部辺りとなる。前者の復原案であれば、今回の調査区は近衛大路末およびその北築地、北側溝の推定位置にあたるが、今回そのような遺構は検

出することができなかった。いずれにしても、街路の位置や寺院の規模など復原案には差異は見られるものの、いずれもその地割は平安京の条坊区割のように方形の区画が想定されている[5)]。ところが、既往の周辺調査成果をみると遺構の主軸方向は東側では10度以上、西側でも区画施設と考えられる南北溝は北に対して約4.5度東に振れている。おそらく近衛大路末も調査地周辺では、これらの遺構と同様に南へ振れているものと考えられる。このような点をふまえると、調査地周辺の白河街区の地割は、地形に制約されながら地割が行われた可能性が考えられる。

最後に砂取土坑について述べる。今回、主に調査区の北半で砂取土坑を多数検出した。今回検出した砂取土坑群の埋没時期は、上述した遺構群と同様に12世紀末から13世紀初頭である。さらに、この土坑の底面で検出した土坑や柱列とも時期差は認められない。砂取が行われた範囲は、例外はあるものの、ほとんどが溝300・368の東側、溝638の北側に集中している。このことから砂取は採掘する場所を決めて行われていたことがわかる。

なお、室町時代以降に関して、今回は顕著な遺構は確認することができなかった。出土した遺物の量も、鎌倉時代までのものと比べると極端に少ない。この点は、今回調査の東隣で行われた2019年度の調査の状況と同様である。前年度の調査では、野壷とみられる土坑群を検出していることから、周辺が耕作地化したと考えられ、当地では柱穴を一定数検出していることから、倉庫などの施設の存在は考えられるが、詳細については判然としない。

註

1）『本朝世紀』仁平元年六月十三日条「…高陽院令供養白川新造堂給。…」
『百錬抄』仁平元年六月十三日条に「高陽院供養福勝院」とあり、供養された寺院が福勝院であるとわかる

2）『兵範記』久寿二年十二月十七日条に高陽院の葬送行程が記されており、
「…、自近衛末東行、入御々堂南西門、…」とあることから、福勝院が近衛大路末に南面していたと考えられている。

3）杉山信三『六勝寺と白河御所』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1991年　講演会資料表紙図
ここでは、福勝院の位置を現在の京都大学吉田キャンパスの南東部辺りとしているが、それでは福勝院が鷹司小路に南面することとなるため、おそらく誤植だと考えられる。

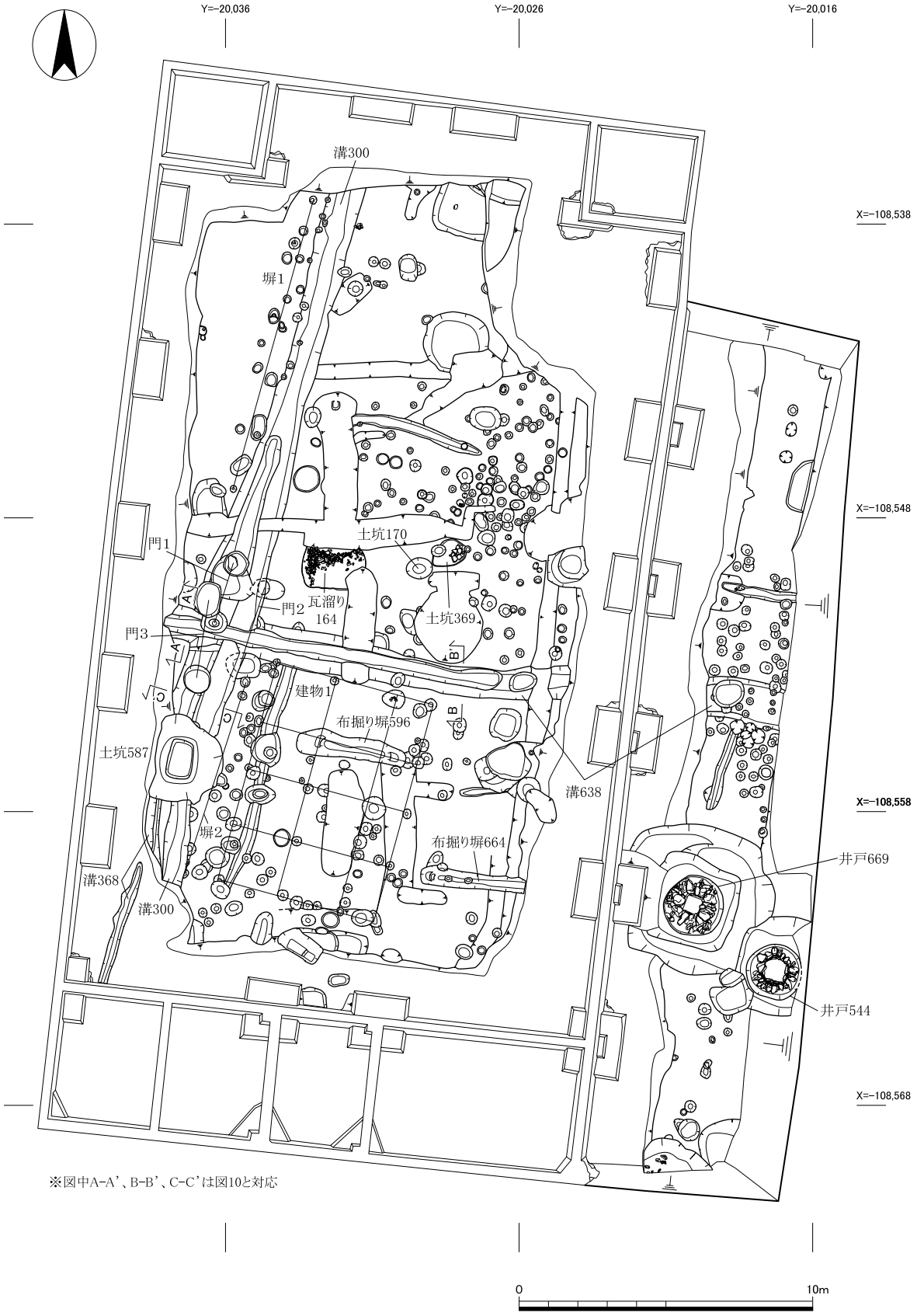
4）濱崎一志「第４章　白河の条坊地割」『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅳ　京都大学埋蔵文化財研究センター　1991年

5）上村和直「院政と白河」『平安京提要』角川書店　1994年　では白河街区の地割は、方位が東に約0.3～0.5度東に振れ、造営尺は0.301～0.303ｍとしている。

図　　版

Y=-20,036
Y=-20,026
Y=-20,016
X=-108,538
X=-108,548
X=-108,558
X=-108,568
砂取土坑群Ⅱ
土坑305
砂取土坑群Ⅰ
土坑384
砂取土坑群Ⅲ
土坑390
土坑406
土坑388
土坑703
柱列1
土坑839
砂取土坑
0
10m

第３面平面図（１：200）



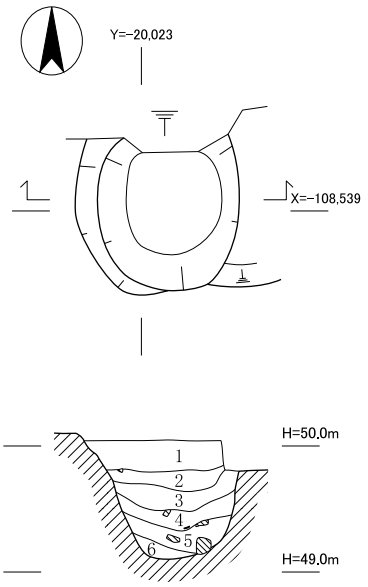
※図中A-A'、B-B'、C-C'は図10と対応

第２面平面図（１：200）

Y=-20,036
Y=-20,026
Y=-20,016
X=-108,538
X=-108,548
X=-108,558
X=-108,568
土坑30
土坑602
0
10m

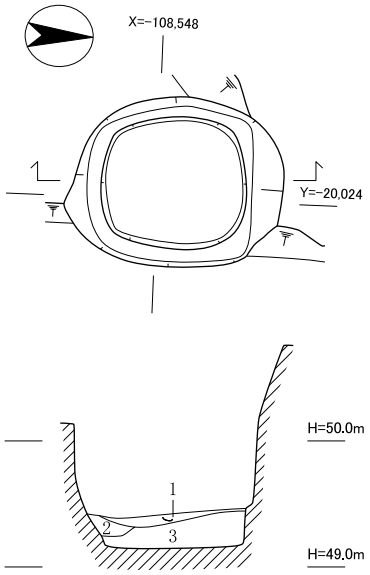
第１面平面図（１：200）

土坑384



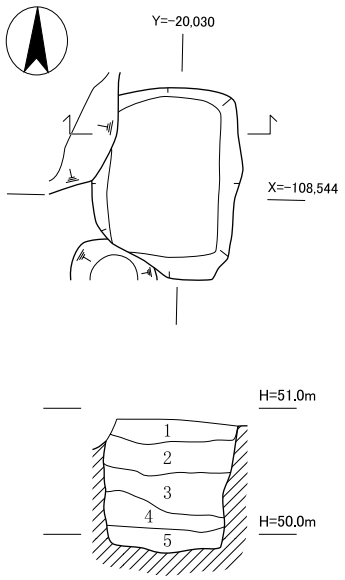
1 10YR5/4にぶい黄褐色 細砂
土師器片含む
2 10YR4/4褐色 シルト 土師器片含む
3 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト
4 10YR3/4暗褐色 細砂 土師器片含む
5 10YR3/3暗褐色 シルト
φ10～15cmの礫含む
6 10YR2/3黒褐色 細砂(粘性有り)

土坑388



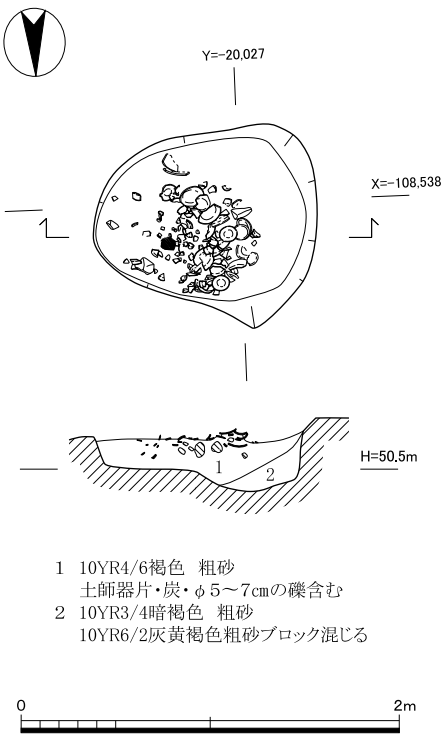
1 10YR4/4褐色 細砂
土師器片含む
2 10YR3/3暗褐色 細砂～粗砂
土師器片含む
3 10YR2/3黒褐色 細砂
土師器片・炭含む

土坑406



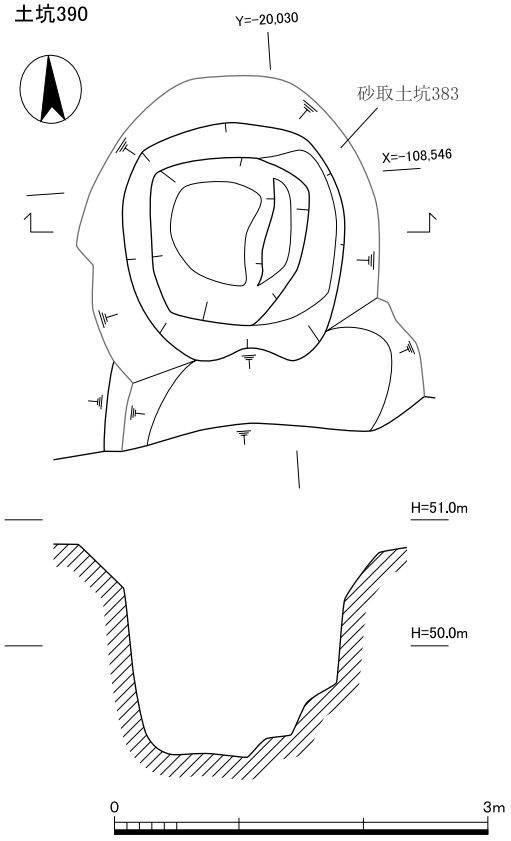
1 10YR5/3にぶい黄褐色 細砂
土師器片含む
2 10YR4/4褐色 細砂
土師器片含む
3 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂
10YR5/3にぶい黄褐色粗砂
ブロック混じる
4 10YR4/4褐色 細砂
土師器片含む
5 10YR6/2灰黄褐色 粗砂

土坑305

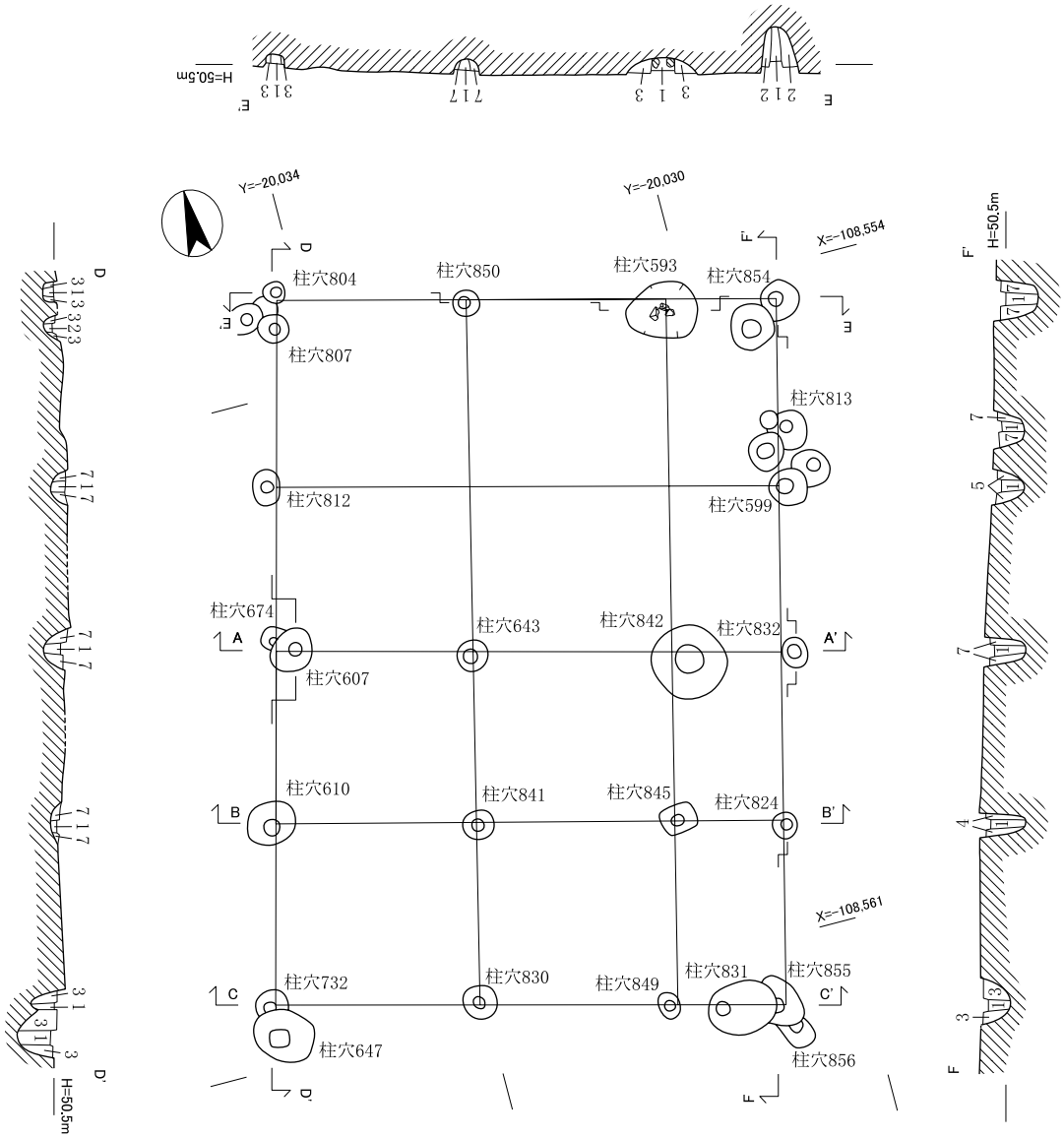


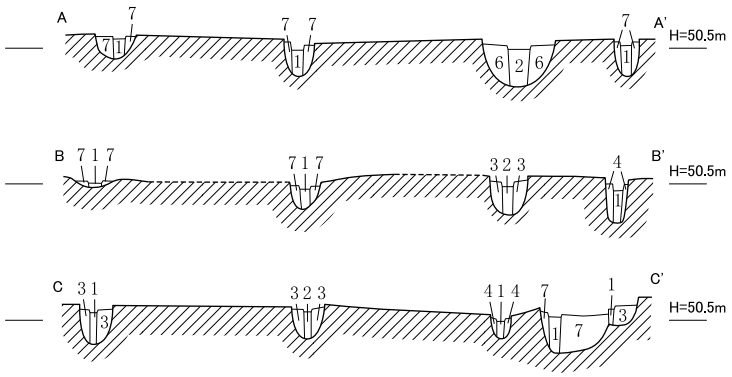
1 10YR4/6褐色 粗砂
土師器片・炭・φ5～7cmの礫含む
2 10YR3/4暗褐色 粗砂
10YR6/2灰黄褐色粗砂ブロック混じる

土坑390



土坑384・388・390・406・305実測図（1：60、土坑305のみ1：40）





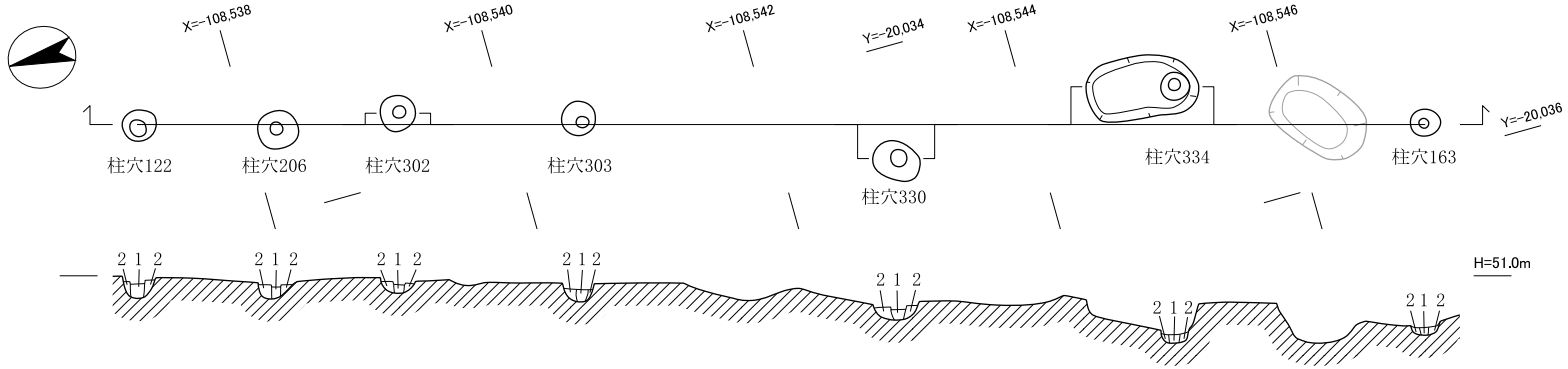
1 10YR3/4暗褐色 細砂
2 10YR3/3暗褐色 細砂
3 10YR4/4褐色 細砂
4 10YR3/2黒褐色 細砂
5 10YR4/6褐色 細砂
6 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂
7 10YR3/3暗褐色 細砂

0 5m

建物１実測図（１：80）

塀1・2実測図（1：60）

塀1



柱穴122
1　10YR3/2黒褐色　細砂
2　10YR3/3暗褐色　細砂

柱穴206
1　10YR4/4褐色　細砂～粗砂　土師器片含む
2　10YR3/4暗褐色　細砂～粗砂

柱穴302
1　10YR4/4褐色　細砂～粗砂　土師器片含む
2　10YR3/4暗褐色　細砂～粗砂

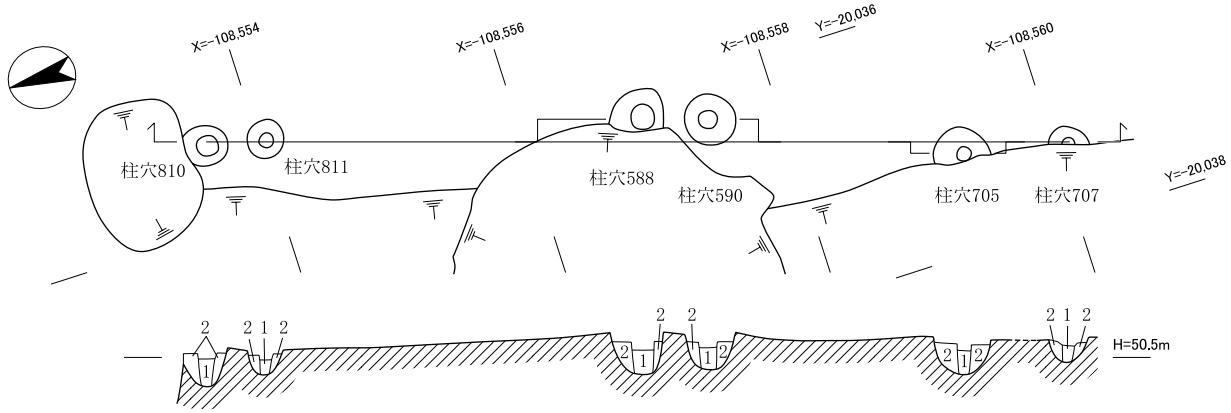
柱穴303
1　10YR5/3にぶい黄褐色　粗砂
2　10YR6/3にぶい黄橙色　粗砂

柱穴330
1　10YR4/3にぶい黄褐色　細砂　土師器細片含む
2　10YR3/4暗褐色　細砂

柱穴334
1　10YR4/3にぶい黄褐色　細砂
2　10YR3/3暗褐色　細砂

柱穴163
1　10YR7/3にぶい黄橙色　粗砂～中砂
2　10YR6/3にぶい黄橙色　粗砂

塀2



柱穴810
1　10YR3/4暗褐色　細砂
2　10YR3/2黒褐色　細砂

柱穴811
1　10YR3/4暗褐色　細砂
2　10YR3/2黒褐色　細砂

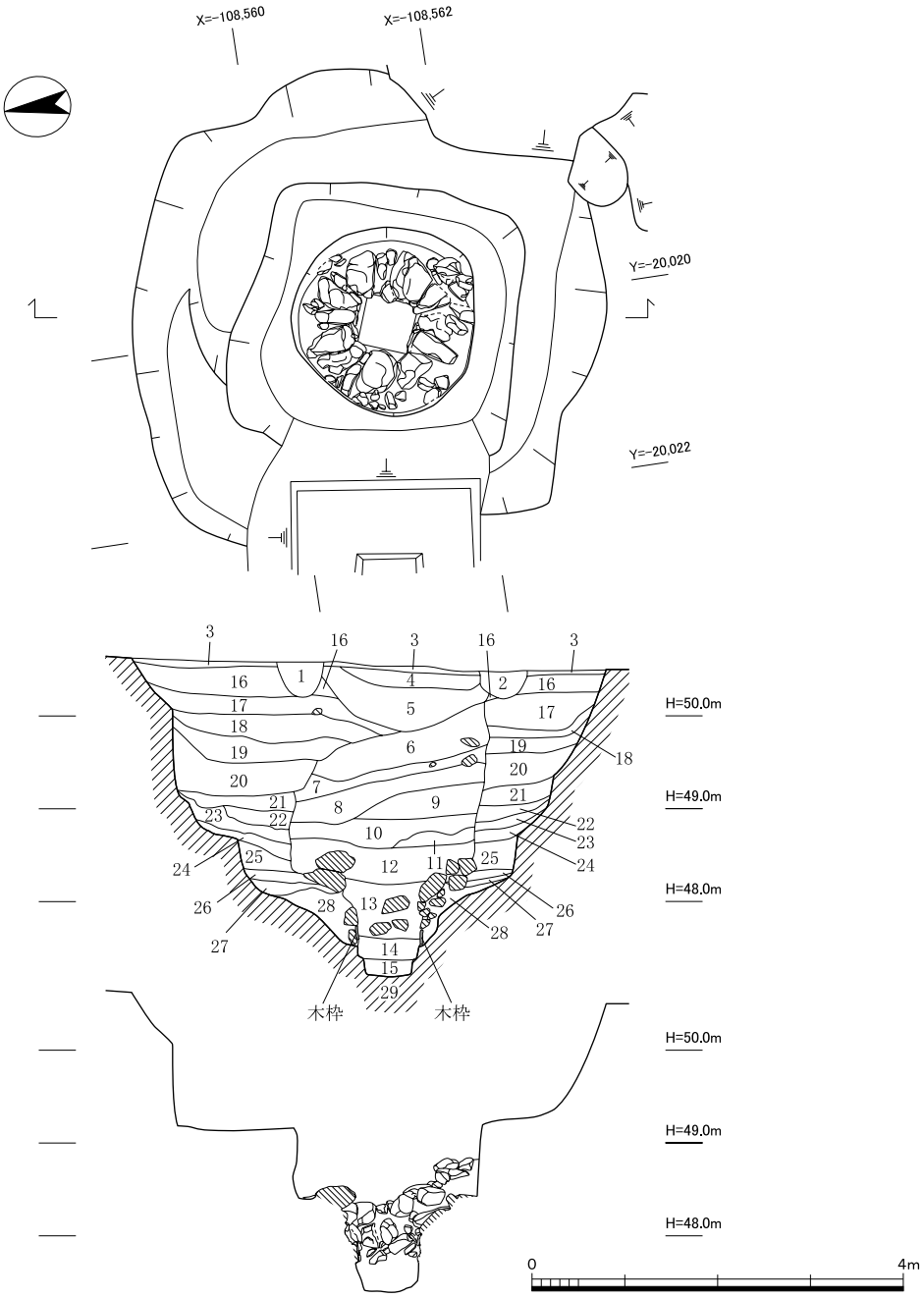
柱穴588
1　10YR4/3にぶい黄褐色　細砂
2　10YR3/4暗褐色　細砂

柱穴590
1　10YR4/3にぶい黄褐色　細砂
2　10YR3/4暗褐色　細砂

柱穴705
1　10YR4/3にぶい黄褐色～4/4褐色　細砂
2　2.5Y4/3オリーブ褐色～3/3暗オリーブ褐色　細砂

柱穴707
1　10YR3/2黒褐色～3/3暗褐色　細砂
2　10YR3/2黒褐色　細砂

0　4m



1　10YR2/2黒褐色　細砂　7.5Y5/2灰オリーブ色粘土ブロック混じる　土師器片含む
2　10YR3/1黒褐色　細砂　7.5Y5/2灰オリーブ色粘土ブロック混じる　土師器片含む
3　2.5Y3/2黒褐色　細砂　7.5Y5/2灰オリーブ色粘土ブロック混じる　土師器片含む
4　10YR2/2黒褐色　細砂　10YR8/2灰白色粗砂混じる　土師器片含む
5　10YR4/2灰黄褐色　細砂～粗砂　10YR7/2にぶい黄橙色粗砂ブロック混じる
6　10YR2/2黒褐色　細砂　7.5Y5/2灰オリーブ色粘土ブロック混じる　土師器片含む
7　10YR4/1褐灰色　細砂　7.5Y5/2灰オリーブ色粘土ブロック混じる　φ10～15cmの礫含む
8　10YR3/1黒褐色　細砂　土師器片含む
9　10YR2/1黒色　細砂～粗砂　土師器片含む
10　10YR6/3にぶい黄橙色　粗砂
11　10YR3/2黒褐色　細砂～粗砂　土師器片含む
12　10YR3/3暗褐色　細砂（粘性有り）　10YR7/2にぶい黄橙色粘土ブロック混じる
13　10YR7/2にぶい黄橙色　粘土
14　10YR6/2灰黄褐色　粗砂
15　10YR4/3にぶい黄褐色　粗砂

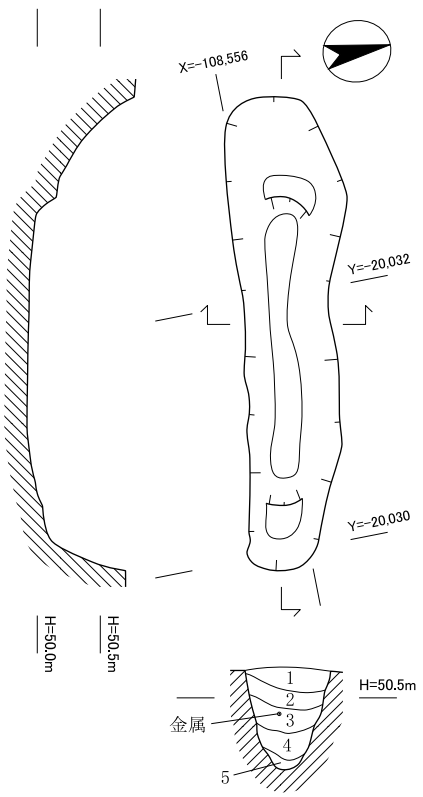
井戸枠内埋土

16　10YR2/3黒褐色　細砂　7.5Y5/2灰オリーブ色粘土ブロック混じる　土師器片含む
17　10YR2/1黒色　細砂～粗砂　7.5Y5/2灰オリーブ色粘土ブロック、2.5Y3/2黒褐色粘土ブロック混じる　土師器片含む
18　10YR2/2黒褐色　細砂　7.5Y5/2灰オリーブ色粘土ブロック、10YR7/2にぶい黄橙色粘土ブロック混じる
19　10YR3/2黒褐色　細砂～粗砂　7.5Y5/2灰オリーブ色粘土ブロック、2.5Y3/2黒褐色粘土ブロック混じる
20　10YR4/2灰黄褐色　粗砂　7.5Y5/2灰オリーブ色粘土ブロック混じる
21　10YR3/2黒褐色～3/3暗褐色　細砂　10YR7/1灰白色粘土ブロック混じる　土師器片含む
22　10YR4/2灰黄褐色　細砂～粗砂　10YR7/1灰白色粘土ブロック混じる
23　10YR5/2灰黄褐色　粗砂　10YR7/1灰白色粘土ブロック混じる
24　10YR4/2灰黄褐色　細砂～粗砂　土師器片含む
25　10YR3/1黒褐色　細砂（粘性有り）　10YR7/1灰白色粘土ブロック混じる
26　10YR4/2灰黄褐色　細砂
27　10YR5/2灰黄褐色　粗砂
28　10YR3/2黒褐色　粗砂　2.5Y7/2灰黄色粘土ブロック混じる
29　10YR5/2灰黄褐色　粘土（地山）

掘形埋土

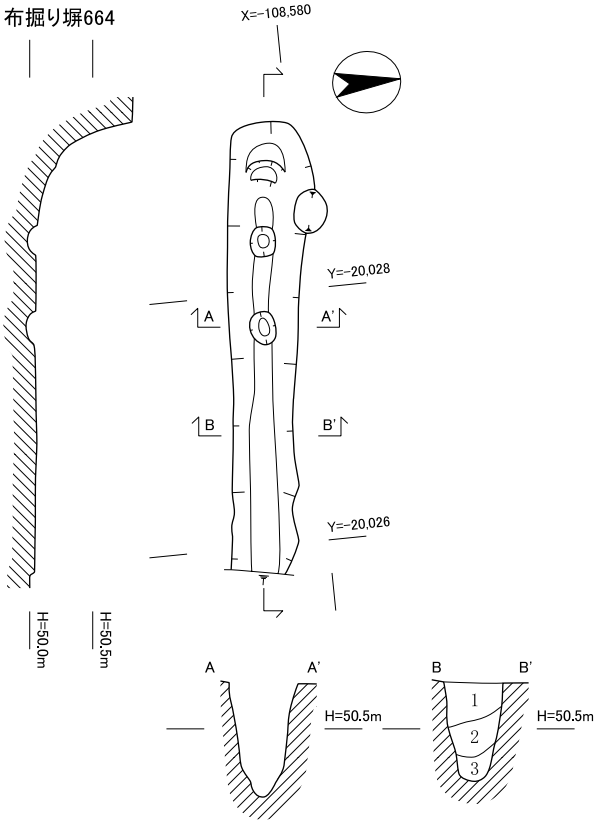
井戸669実測図（1：80）

布掘り塀596



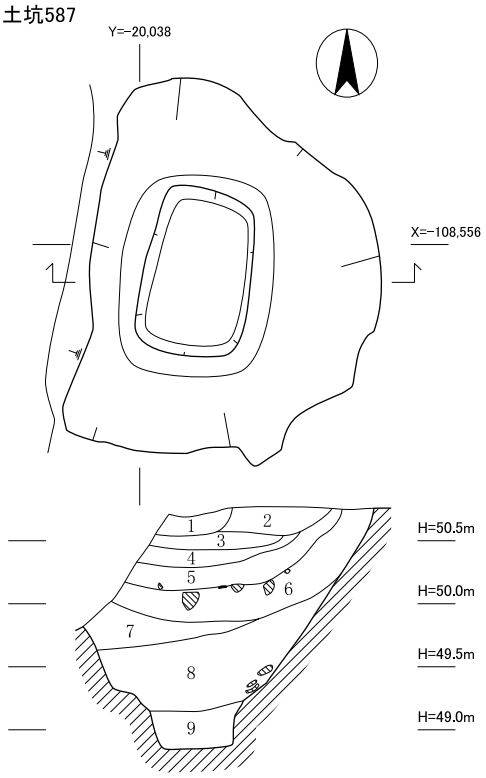
1 10YR3/2黒褐色 細砂 土師器片含む
2 10YR3/3暗褐色 シルト 土師器片含む
3 10YR3/2黒褐色 シルト 土師器片・金属製品含む
4 10YR3/4暗褐色 細砂 10YR5/4にぶい黄褐色細砂ブロック混じる
5 10YR6/3にぶい黄橙色 粗砂

布掘り塀664



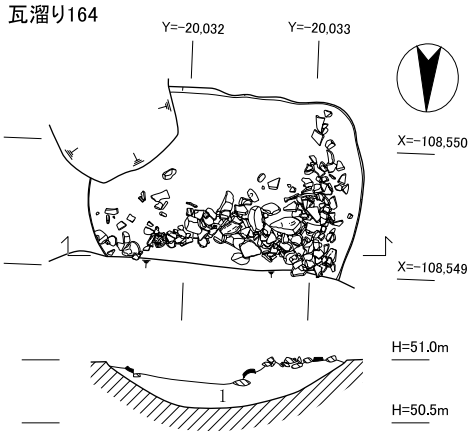
1 10YR3/3暗褐色 細砂 土師器片含む
2 10YR3/3暗褐色～2/3黒褐色 細砂 土師器片含む
3 10YR2/2黒褐色 細砂 土師器片含む

土坑587



1 10YR6/3にぶい黄橙色 粗砂
2 10YR4/2灰黄褐色 細砂 土師器片含む
3 10YR3/2黒褐色 細砂
10YR5/3にぶい黄褐色粗砂ブロック混じる 土師器片含む
4 10YR2/2黒褐色 細砂
10YR5/3にぶい黄褐色粗砂ブロック混じる
5 10YR3/2黒褐色 細砂 土師器片含む
6 10YR3/3暗褐色 細砂 土師器片・瓦片・φ15～20cmの礫含む
7 10YR2/2黒褐色 細砂
10YR8/4浅黄橙色シルトブロック混じる 土師器片含む
8 10YR3/2黒褐色 細砂 土師器片含む
9 10YR6/2灰黄褐色 粗砂

瓦溜り164

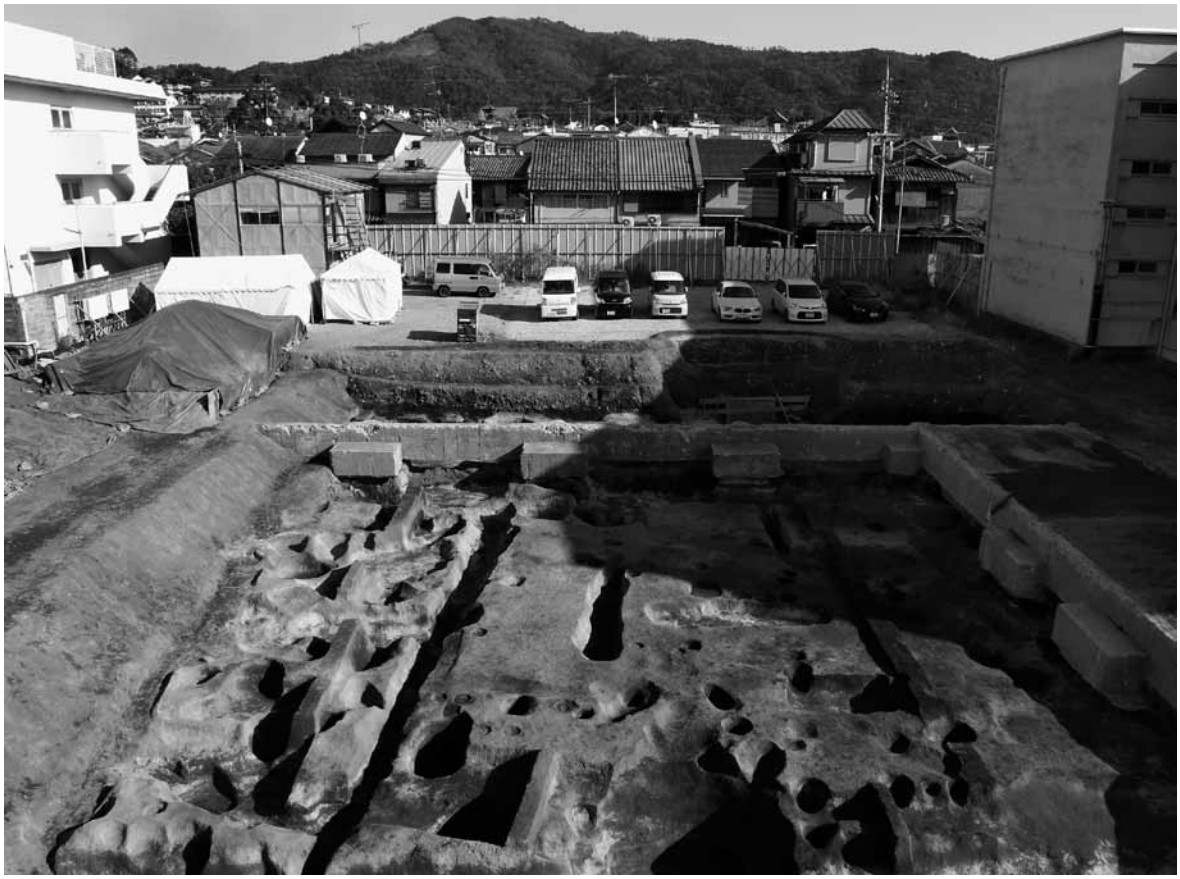


1 10YR3/3暗褐色 細砂 瓦片・φ10cm程の礫含む

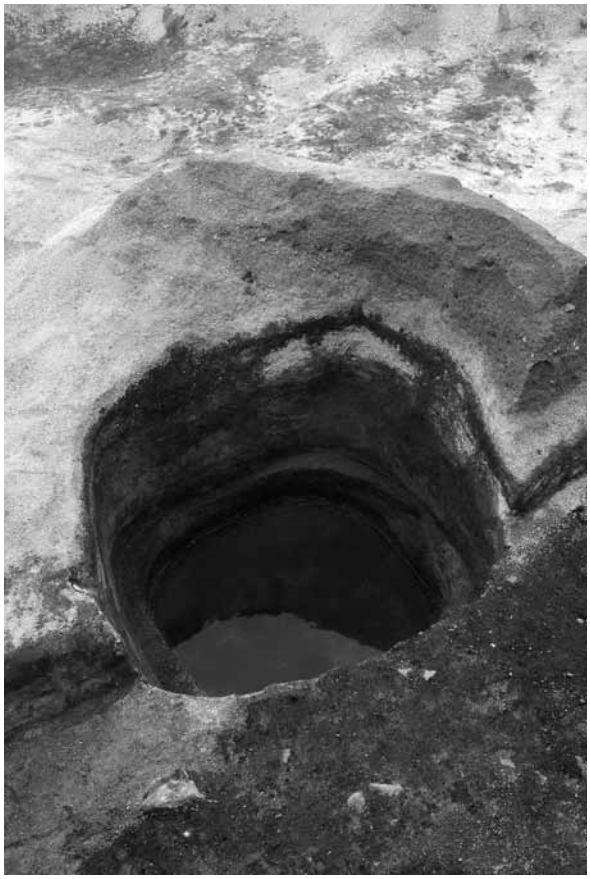
0 3m

布掘り塀596・664、瓦溜り164、土坑587実測図（1：60）

１　調査区北半　第３面全景（北から）

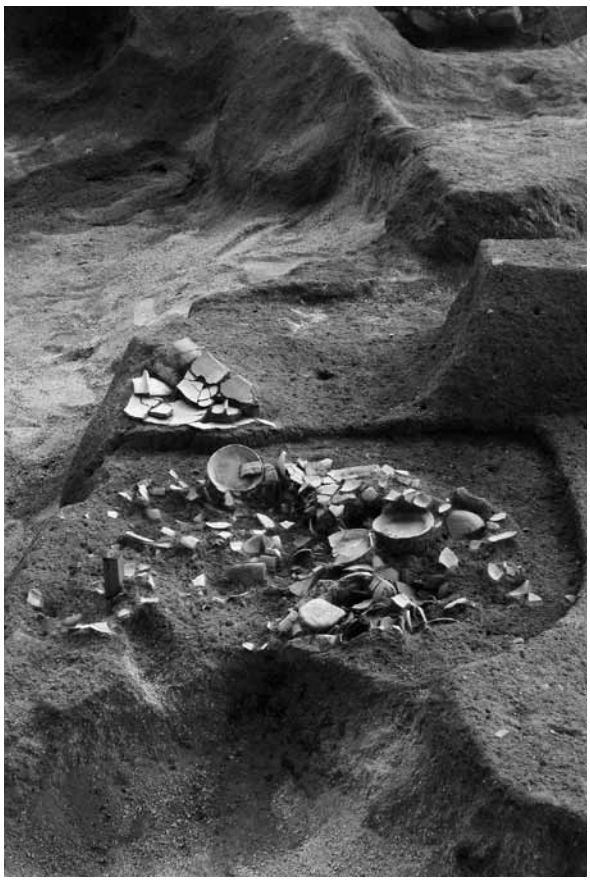


２　調査区南半　第３面全景（西から）



1　土坑388完掘状況（南東から）

2　土坑390完掘状況（南から）



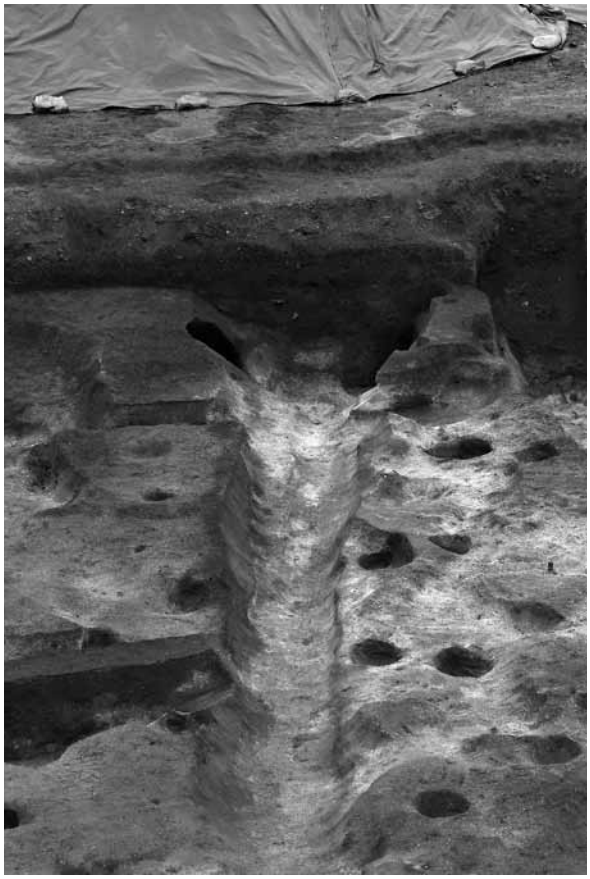
3　土坑305遺物出土状況（北から）

4　柱列１（東から）

1　調査区北半　第２面全景（北から）

2　調査区南半　第２面全景（西から）

図版12　遺構

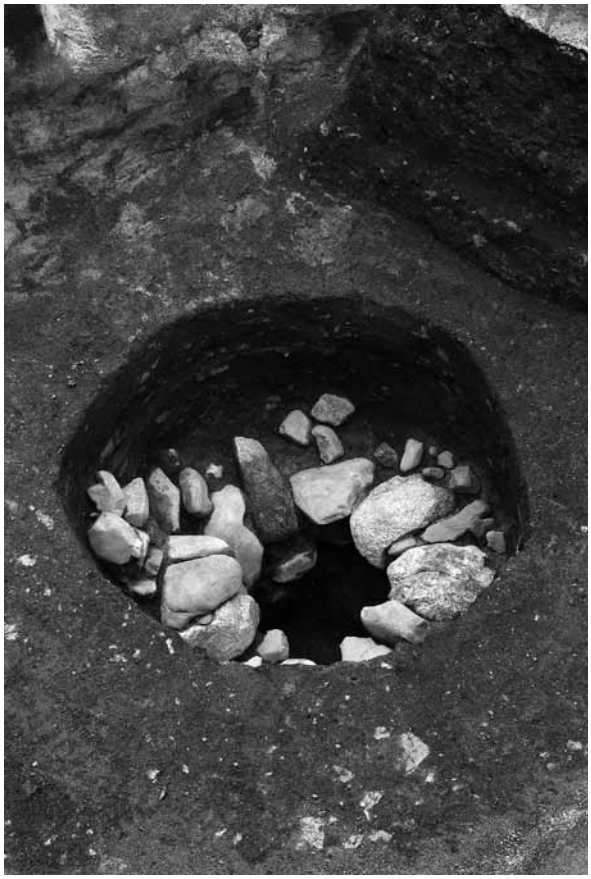


1　溝300・368（調査区北半、北から）

2　溝300・368（調査区南半、北から）

3　溝638（西から）

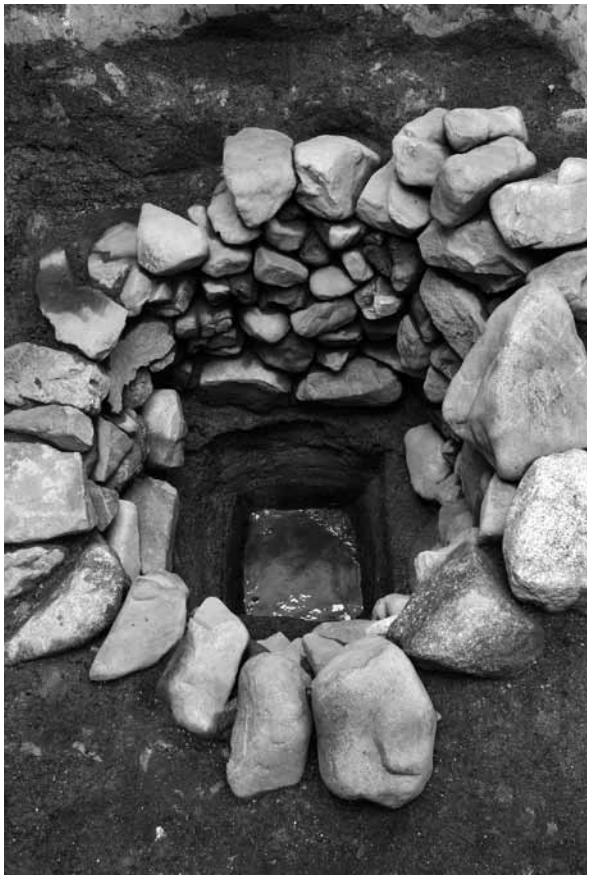
4　門１～３完掘状況（南東から）



1　井戸669（北東から）

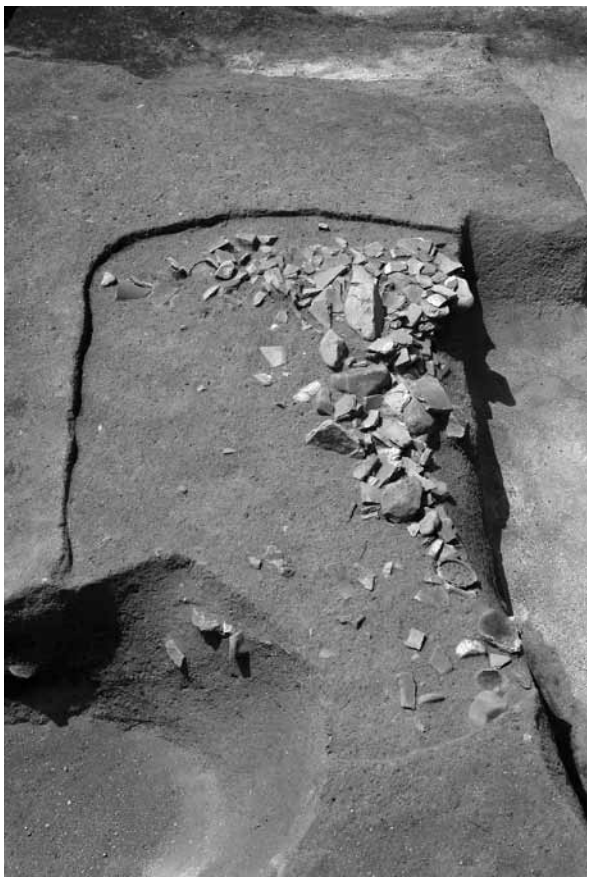
2　井戸669掘り下げ状況（北西から）

3　井戸669断面（北西から）



1　井戸544（北から）

2　布掘り塀664（東から）



3　瓦溜り164（東から）

4　瓦溜り164瓦出土状況（北東から）

1　調査区北半　第１面全景（北から）

2　調査区南半　第１面全景（北から）

1

4

8

9

43

46

49

50

58

65

69

76

80

83

土器類 1

84

86

89

90

91

94

95

101

102

土器類２

瓦1

瓦3

瓦6

瓦9

瓦10

瓦11

瓦16

瓦22

瓦23

土1

石1

瓦類・土製品・石製品

報　告　書　抄　録

ふりがな	しらかわがいくあと・よしだかみおおじちょういせき
書名	白河街区跡・吉田上大路町遺跡
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０２０－１２
編著者名	松永修平
編集機関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発行所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	西暦2021年12月19日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
白河街区跡（しらかわがいくあと） 吉田上大路町（よしだかみおおじちょう）遺跡（いせき）	京都市左京区（きょうとしさきょうく）吉田近衛町（よしだこのえちょう）26番地53他	26100	417 400-4	35度02分13秒	135度78分05秒	2020年７月13日～2020年12月19日	790㎡	整備工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
白河街区跡 吉田上大路町遺跡	都城跡 集落跡	平安時代	土坑	土師器、瓦類、土製品、石製品など	鎌倉時代の門３基、南北方向の溝２条などを検出した。この門と溝は、調査区の溝以東の空間と、調査区外西側とを区画するものと考えられる。
		鎌倉時代	建物、門、溝、井戸、布掘り塀、土坑など	土師器、焼締陶器、輸入陶磁器など	
		室町時代	土坑	土師器、輸入陶磁器など	
		江戸時代		磁器染付	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2020-12

白河街区跡・吉田上大路町遺跡

発行日　2021年12月19日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　TEL 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093　TEL 075-256-0961